

# 川越田遺跡Ⅱ

(B・C地点の調査)

児玉町遺跡調査会

# 川越田遺跡Ⅱ

(B・C地点の調査)

1993

児玉町遺跡調査会

## 序

埼玉県の北部に位置する人口を万人余りの児玉町は、南側に陣見山をはじめとする標高300m級の山々が連なる上武山地を背し、北側にそれらの山麓から延びる丘陵や低台地と、酒流の小山川や女塚川によって開拓された沖積低地を有する、自然と人に恵まれた町であります。このような自然環境に恵まれた当町は、太古の時代より大変住み良い場所であったようで、現在町内には300箇所以上もの埋蔵文化財が存在し、県内でも有数の遺跡の宝庫として知られております。

これらの文化財は、我々の住む地域の歴史を知る上でかけがえのない文化遺産であるとともに、国民共有の貴重な財産として、後世に守り伝えていかねければならないことは、現代に生きる我々の重要な責務の一つであると考え、その保護と普及に努力しており、文化振興の一環としてその活用を図ってきたところであります。

今回の本庄今井工業団地取付道路建設に伴って発掘調査された川越川遺跡につきましても、その保存措置について関係機関と協議を重ねてまいりましたが、現状での保存は困難であるとのことから、やむをえず破壊される部分については、発掘調査を実施して「記録保存」という形で後世に伝えることになったものです。

発掘調査から本書刊行までに、埼玉県教育庁文化財保護課及び本庄市をはじめとする関係機関や多くの方々よりご協力を賜ったことにたいして、心より感謝申し上げますとともに、本書が学術研究や様々な教育活動に広く活用されることを念願する次第であります。

平成5年3月15日

児玉町教育委員会教育長  
児玉町遺跡調査会会長

高 丘 文 雄

## 例 目

1. 本書は、埼玉県北埼玉郡大里町大字大野字樺木・上野下ノノ丁に位置する川越川遺跡群・A地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、令和2年度に川越川遺跡群の発掘工事に伴う事前の足場確保を目的として、本作業の発掘を受けた大野町直轄調査会が実施した。なお、関連発掘調査及び発掘作業は市内各地域が担当した。
3. 発掘調査の期間は、平成30年3月20日～3月26日および平成31年1月21日～平成31年1月22日の計3ヶ月を要し、報告書発行のための整理作業は、平成31年12月28日～平成32年3月27日の期間に実施した。
4. 発掘調査結果は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和39年～37年にかけて大野工場跡地敷留宅跡建設に伴って発掘調査を実施したA地点をA地点とし、今回発掘調査を実施した発掘地盤部分より北江・北洲地区部分を中心に地名と呼称する。
5. 遺構呼称は、A地点で検出された遺構の同じと考えられるものには同一番号とし、新たに検出された遺構についてはA地点からの絞り番号とした。
6. 本書の執筆及び編集は、市内で行った。
7. 発掘調査及び本書発行にあたって下記の方々や機関より、ご協力・ご助力をいただいた。記して感謝いたします。

宮崎 浩一、横野 啓典、伊村 勲、市川 輝、寺上内蔵、寺井 浩、  
石塚 隆、大田博之、金子孝男、高本利敏、佐藤好之、塩崎 隆、  
渡辺 浩一、林村 康人、高橋 一夫、岡村 誠、宮田和夫、高橋 誠典、  
中村 貴司、高谷 恒志、柳川 一博、丸山 誠、丸山 隆一、水村 孝行、  
宮井 浩一、宮本 直樹、矢内 勲。

埼玉県教育財文化財保護課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、  
本庄市建設課、真下建設。

8. 発掘調査及び本書発行のための発掘作業に以下記の方が参加した。  
高木ツク、藤島清江、津川寛野、駒止アツ子、内田千生、中野千太郎、  
生野静子、横沢トキ子、小野野アツ子、藤崎百合子、久米とし子、  
小島真子、小林節子、高木スズ江、藤本久一、鈴木美江、岡田康久、  
下、岡田トコ、池手イネ子、戸沢リチ子、戸田明太郎、中よこ江、  
中尾成子、野本ツツ江、野本ミチ子、長谷川礼次、山崎純博、安部  
一弘、渡邊裕子。

# 目 次

序	
例 言	
第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第Ⅲ章 川越田遺跡の概要	5
第Ⅳ章 検出された遺構と遺物	9
第1節 住 居 跡	9
第2節 土 倉	31
第3節 溝 跡	32
第4節 河 川 跡	35
第5節 その他の遺構と遺物	44
第Ⅴ章 川越田遺跡出土の引き篋について	51
参考文献	57
写真図版	

平成3年度文化財活用調査報告書

分類	品目名称	所在地	種別	品目名称	所在地	
遺物	阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)	雑器	日向陶器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)	
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)		宮久保一	(阿蘇町土器伝習館蔵)	
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)		雑器	日向陶器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)			阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)			阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)			阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)			阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)			阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)			阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)			阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)
阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)	阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)			
阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)	阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)			

平成4年度文化財活用調査報告書

分類	品目名称	所在地	種別	品目名称	所在地	
遺物	阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)	雑器	宮久保一	(阿蘇町土器伝習館蔵)	
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)		雑器	日向陶器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)			阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)			阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)			阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)			阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)			阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)			阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)			阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)
	阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)		阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)	
阿蘇土器	(阿蘇町文化財伝習館蔵)	阿蘇土器	(阿蘇町阿蘇総合文化館蔵)			

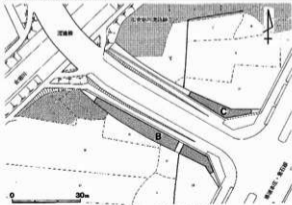


図1 阿蘇町阿蘇総合文化館B・C地点突圍調査位置図

## 第1章 発掘調査の経緯と経過

現玉野本工場地帯大字今井から見玉町大字高岡の一部にかかると見玉川筋に建設予定の本工今井工業団地は、「地下埋蔵品探検法」並びに「埋玉品申請計画」による埋込テクノグリーン構想に基づき、埋込地の地帯化と埋土の処理ある種認可目的として、埋蔵品を量目が平成2年度の完成を目指して設置している事業である(埋玉品会埋蔵品法)。この本工今井工業団地造成事業の遂行に伴い、平成2年8月8日に埋玉品会埋蔵品と本工町場が荒川町の一言により、「本工今井工業団地造成事業に関する基本協定書」が締結され、その中で埋蔵品区域内に所在する埋蔵文化財については、本工市が発掘調査を実施することとされた。

平成3年に11月6日、本工今井工業団地造成事業の基本計画に基づく工業団地取付道路建設の事業委託を受けた本工市より、「今井工業団地埋蔵品取付道路建設に伴う文化財の発掘調査について」(本議発第39号)が、その発掘地の見玉町教育委員会に協議と依頼があった。この埋蔵品取付道路は、見玉工業団地取付道路として建設されたもので、すでに昭和46年～49年にかけて埋蔵品埋蔵文化財調査事業団により、埋蔵品遺跡(A地点)として発掘に発掘調査が実施されている場所である(遺跡発掘記)。今回協議の対象となったのは、今井工業団地の取付道路としてその関係が認識されることになった新発(B・C地点)で、当然A地点と関連する遺跡の存在が疑念であることから、その確認にあたっては事前に当該保存のための発掘調査を実施する必要があることを判断した。そして、発掘調査の実施機関については、埋蔵品埋蔵文化財保護課や本工町教育委員会等の関係機関と協議した結果、取付道路建設部分(工業団地造成事業の取付道路外)の見玉町に位置するため、見玉町教育委員会がその具体的な調整を行うことになり、見玉町教育委員会の協賛のもと見玉町埋蔵品協会が本工市と委託契約を締結して発掘調査を実施することになった。

以上のような経緯を経て、平成4年2月3日に本工市見玉町本工より「埋蔵文化財発掘地域」(本議第30号)が、見玉町埋蔵品調査委員会見玉町本工より「埋蔵文化財発掘調査の概況」が、見玉町教育委員会と埋蔵品協会と締結文化財協会に提出され、3月より発掘調査を実施する運びとなった。なお、文化庁からは、平成4年4月24日付け埋蔵品法の改正による「埋蔵文化財の発掘について」の告示通知があった。

発掘調査は、工業団地や埋蔵品協会のスタッフも関係の関与から、平成3年度と平成4年度に分けて実施することになり、平成3年度については取り急ぎB地点とC地点をそれぞれとし、3月2日に本工市と見玉町埋蔵品調査会で平成3年度実施分についての委託契約が締結された。発掘の発掘調査は、平成4年2月2日～3月2日という半年間の短い期間に行われた。

平成4年度分については、当初平成3年度分に連続して実施する予定であったが、道路の事情により予定がかなり遅れ、10月になってようやく平成4年度分の発掘調査に関する委託契約が締結された。しかし、秋先の都合により次第に発掘作業に着手できなかったのは、初冬の風邪を患った11月も末になってからである。そのため発掘の発掘調査は、工事と並行して実施するという作業条件の中で、平成5年の1月末まで行った。

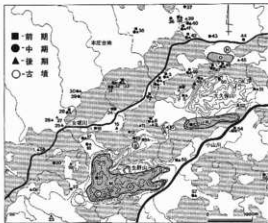


圖 2 黃河中下游地區新石器時代遺址

1 裴李崗文化(新石器時代)	31 仰光文化(新石器時代)	49 馬家浜文化(新石器時代)	A 崑崙山文化(新石器時代)
2 磁山文化(新石器時代)	32 岳陽新石器文化(新石器時代)	50 新石器時代(新石器時代)	B 仰光文化(新石器時代)
3 仰光文化(新石器時代)	33 裴李崗文化(新石器時代)	51 裴李崗文化(新石器時代)	C 仰光文化(新石器時代)
4 仰光文化(新石器時代)	34 仰光文化(新石器時代)	52 仰光文化(新石器時代)	D 仰光文化(新石器時代)
5 仰光文化(新石器時代)	35 仰光文化(新石器時代)	53 仰光文化(新石器時代)	E 仰光文化(新石器時代)
6 仰光文化(新石器時代)	36 仰光文化(新石器時代)	54 仰光文化(新石器時代)	F 仰光文化(新石器時代)
7 仰光文化(新石器時代)	37 仰光文化(新石器時代)	55 仰光文化(新石器時代)	G 仰光文化(新石器時代)
8 仰光文化(新石器時代)	38 仰光文化(新石器時代)	56 仰光文化(新石器時代)	H 仰光文化(新石器時代)
9 仰光文化(新石器時代)	39 仰光文化(新石器時代)	57 仰光文化(新石器時代)	I 仰光文化(新石器時代)
10 仰光文化(新石器時代)	40 仰光文化(新石器時代)	58 仰光文化(新石器時代)	J 仰光文化(新石器時代)
11 仰光文化(新石器時代)	41 仰光文化(新石器時代)	59 仰光文化(新石器時代)	K 仰光文化(新石器時代)
12 仰光文化(新石器時代)	42 仰光文化(新石器時代)	60 仰光文化(新石器時代)	L 仰光文化(新石器時代)
13 仰光文化(新石器時代)	43 仰光文化(新石器時代)	61 仰光文化(新石器時代)	M 仰光文化(新石器時代)
14 仰光文化(新石器時代)	44 仰光文化(新石器時代)	62 仰光文化(新石器時代)	N 仰光文化(新石器時代)
15 仰光文化(新石器時代)	45 仰光文化(新石器時代)	63 仰光文化(新石器時代)	O 仰光文化(新石器時代)
16 仰光文化(新石器時代)	46 仰光文化(新石器時代)	64 仰光文化(新石器時代)	P 仰光文化(新石器時代)
17 仰光文化(新石器時代)	47 仰光文化(新石器時代)	65 仰光文化(新石器時代)	Q 仰光文化(新石器時代)
18 仰光文化(新石器時代)	48 仰光文化(新石器時代)	66 仰光文化(新石器時代)	R 仰光文化(新石器時代)
19 仰光文化(新石器時代)	49 仰光文化(新石器時代)	67 仰光文化(新石器時代)	S 仰光文化(新石器時代)
20 仰光文化(新石器時代)	50 仰光文化(新石器時代)	68 仰光文化(新石器時代)	T 仰光文化(新石器時代)
21 仰光文化(新石器時代)	51 仰光文化(新石器時代)	69 仰光文化(新石器時代)	U 仰光文化(新石器時代)
22 仰光文化(新石器時代)	52 仰光文化(新石器時代)	70 仰光文化(新石器時代)	V 仰光文化(新石器時代)
23 仰光文化(新石器時代)	53 仰光文化(新石器時代)	71 仰光文化(新石器時代)	W 仰光文化(新石器時代)
24 仰光文化(新石器時代)	54 仰光文化(新石器時代)	72 仰光文化(新石器時代)	X 仰光文化(新石器時代)
25 仰光文化(新石器時代)	55 仰光文化(新石器時代)	73 仰光文化(新石器時代)	Y 仰光文化(新石器時代)
26 仰光文化(新石器時代)	56 仰光文化(新石器時代)	74 仰光文化(新石器時代)	Z 仰光文化(新石器時代)
27 仰光文化(新石器時代)	57 仰光文化(新石器時代)	75 仰光文化(新石器時代)	AA 仰光文化(新石器時代)
28 仰光文化(新石器時代)	58 仰光文化(新石器時代)	76 仰光文化(新石器時代)	AB 仰光文化(新石器時代)
29 仰光文化(新石器時代)	59 仰光文化(新石器時代)	77 仰光文化(新石器時代)	AC 仰光文化(新石器時代)
30 仰光文化(新石器時代)	60 仰光文化(新石器時代)	78 仰光文化(新石器時代)	AD 仰光文化(新石器時代)



## 第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

本遺跡は、ノボル入道跡の北東より北東約0.5kmの本郷域内に位置し、開拓前奥平遺跡本所遺跡（イブドー・シュンドの西側の約0.6kmにある開拓本所・奥平跡）に隣接している。本遺跡周辺の地形は、埼玉県と群馬県の県境をなす神流川によって形成された沖積川扇状地の延長部地域に当たり、南西から北東方向に向かって緩やかに傾斜している。沖積川扇状地の南縁は、南側の土岐山地と足尾川扇状地にあたる八丁下一帯の扇状地の境界部付近に際する女堀川や金原川が流れており、これらの影響による土岐の広い沖積扇状地が扇状地の南縁に隣接している。沖積川扇状地の西端には足尾川扇状地から広がる足尾地の沖積扇状地が、東端には足尾川扇状地から河川の発源付近によって形成された足野の・扇状地・大久保山の扇状地が別々に存在している。この沖積扇状地は、中央を流れる女堀川を中心として、西側を本郷古跡が、東側を神流川によって囲まれるように自然に展開しており、地理的に一つの小流域を形成している。

本遺跡の遺跡は、この女堀川本流の本郷域に位置し、古代より女堀川流域における農業生産の中心の集落として発展した地域であり、江戸時代初期までは低地部内に一帯四方の半土居地蔵りが土瓦葺に保存していた。このため内地域には各時代におたり多数の遺物が存在しているが、特に古墳時代の遺跡数の多さとその密度の高さは、県内でも屈指の地域と目える。これらの遺跡は、古くは本郷古跡の本郷遺跡区、現住土居及びその周辺、低地内の自然堤防上のまつの遺跡列跡等を有する扇状地に立地している。本遺跡は、女堀川右岸の堰高地上に面する自然堤防上に立地しているが、この遺跡内の自然堤防や扇状地は、瓦葺よりも土居が普及したために陥没して利用されており、江戸時代築造工前には水田確保に扇状地の活用として用いることができた。しかしこれらの中には、古代や中世の本郷域に属してかなり部を占めたものもあり、本遺跡や隣接遺跡なども大部分が本郷下に埋没していたもので、事前の試掘調査などによって初めてその存在が明らかになった遺跡も多い。

女堀川中流域が発生する河原の遺跡には、本庄赤土瓦葺跡（埋没1980）や足尾川扇状地遺跡（馬高窪田町等の縄文土器を主体とする遺跡、本庄赤土瓦葺山遺跡（埋没地1980）や足尾町を野山瓦葺跡（埋没1982）等の赤土瓦葺土器を主体とする遺跡、そして足尾町取本遺跡跡（埋没地1977）や本庄赤土瓦葺赤土瓦葺跡（本庄赤土瓦葺跡のように、縄文式土器を主体とする遺跡などがある。これらの遺跡は、当時の生活からなる単一時期の比較的少量の遺物を集積したと考えられるものが多く、大久保川や足野川の扇状上やその下に広がる低小を台地上に立地している。女堀川流域の自然的には、そのほぼ全域にあたっては埋没現象が広範囲にわたって多く発生しているが、その結果によれば低地内の自然堤防上や堰高地上には該期の遺跡はまったく存在せず、またその影響を免れず低地内を自然的に埋没していたような遺跡も認められない。このことから該期の集積は、比較的広大な低地部の集積を基礎としていたのではなく、集積が立地する扇状地内や台地内に入り込む小規模な集積を軸とした水田確保と、堰高地の創出を基盤にしていたものと推測される。

古墳時代前期の遺跡は、古墳時代より埋没して消滅するものは少なく、扇状地になって新たに出現するものが多い。現在のところ、本遺跡や本庄赤土瓦葺遺跡跡（長谷川1987）のように、扇状中流域の丘陵になって内地域内に出現し、扇状地・扇状地には低地内の足尾町赤土瓦葺跡跡（埋没1982）のような大

尾根帯を中心、辺縁部が増加して中流域の全域に及ぶのが図り、沖積階地内多環状的に開発の現象とされていることが窺える。また、弥生時代前期にも集落が営まれていた筑前町飯立や東瀬戸-全野の遺跡-筑生町野山遺跡などにも前期の遺構が見られるが、これらの立地帯を主体とする遺跡は、前期には方墳環溝墓が多数あり、環溝となっているものが多い。このような集落内への環状帯の編组的な進出を背景として、筑前中流域古墳の中東部に位置する長い低地上には、墓内帯の古墳として有名な古墳の $\pi$ を囲む前方後方墳の築山古墳(即本館1986)が築造されている。中流域の筑前遺跡から推しよると、筑生町飯立や東瀬戸(野山遺跡)のように古墳の多環状的展開の系統を引く土器も若干残存するが、畿内-東瀬戸部-近畿-筑前東地方などの影響を強く受けたいわゆる外系系土器群が主体をなし、新しくなるにつれて筑前西縁部の土器が顕著になる。

中期の遺跡は、前期における遺跡の分布と大差はなく、集落内及びその周辺にさらに展開する傾向が見られるが、前期遺跡や元玉川(筑前遺跡)-西瀬戸遺跡などのような、地域内に複数の大規模な集落的集落が出現し、それらを中心にして自然堤防上や水田(筑前東瀬戸部)及び丘陵部周辺に多くの小規模な集落が形成されている。これらの集落は、前期頃集落と同じく伊を伴う住居で構成されていたが、中流域よりほとんどの集落にササガが埋積されるようになる。前期の好景況を背景も、前期からの集落開発を下地としていることが顕著されるが、中期では前期に比べて集落内での遺跡の展開が顕著に認められる。特に前期では地形的制約を強く受けたいわゆる環状帯であったと推察されるのに対して、中期では集落内の自然堤防上や高地上にも遺跡の展開が認められ、筑生町飯立遺跡や堀川筋遺跡では比較的広範囲の大きな環状的な水田が築造されており、地形的制約もめる程度寛延した環状的な集落が営まれていたことが伺われる。このような前期からの集落的な展開を背景として、中期には筑生町飯立 $\pi$ を囲む築山部で最大級の円墳である筑生町築山神社古墳(即本館1986)・筑生町築山山形古墳(即本館1986)・中津市の築山古墳(即本館1986)が、筑前域内に築造されている。この古墳群は、築山帯や伊帯が顕著し、それぞれ数丁単位の規模を有するという特徴があり、相互に地形的近接があまり認められず、比較的孤立形態に位置している。

前期の遺跡は、中期の遺跡とはほとんど大差がないが、適々の遺跡において遺跡の密度が高い傾向が見られる。また、少数ではあるがこの時期より粗大形環溝墓を伴う集落も存在する。集落的集落は、前期になっても顕著であるが、新しくなるにつれて規模を縮小するようである。これらの環状帯のうらも、築山内の自然堤防上や高地上に立地する集落は、環状帯内にならざるも認められ、その築山古墳の環溝部や伊帯部周辺の白地に集積する。これは中流域の集落内に築山帯部を取り囲む工するための近時的な集積帯と推察されている。前期から中期を通じて環溝として高踏されてきた築山土には、前期になって筑生町飯立 $\pi$ の筑生町野山(即本館1986)や全野山(即本館1986)の首長墓が築造されるが、これらの首長墓は中期の大型円墳に変わって前方後方墳を採りしていることは注目される。また、後になってこれらの集落土には元野山古墳群(即本館1986)や塚本古墳群(即本館1986)のように環溝帯が形成される。筑前域の大規模に、沖笠を使用した環溝帯の築山式石室が一時期であり、筑前域と近畿部にある類似の遺跡上の、内野前山古墳を築造した筑前地帯の築山式石室の多い塚-小島古墳群(中津市1986)や築山古墳群(即本館1986)とは、石室構築技法に相違を窺うが見られ、これらとは別系統の集落的な集落であることが窺われる。

## 第三章 川越田遺跡の概要

本遺跡は、女塚川中流の標高約200mを誇る自然堤防上に立地する古墳時代の集落跡で、同じ自然堤防上に立地する北宮町の200mの狭長遺跡や南側の300mの櫛形遺跡とは、遺構の分布が連続する同一遺跡を構成すると考えられている。すでに本遺跡は、昭和36年～37年にかけて元玉工業団地の建設に伴って調査されたが、埼玉基礎文化財調査事業団によってA地点が調査されており、古墳時代前期～後期の位置が判明。土坑3基、溝跡14基、土坑跡1基が報告されている。

今回のB・C地点の調査は、今件工業団地の反対側遺跡に伴う拡張部分を対象としたもので、南側のB地点で住居跡1軒、土坑3基、溝跡も多数が判明したが、北側のC地点で住居跡1軒、溝跡2基、竹筒不明遺構1(※X-1)、黒色土遺物包含層が検出されている。これらの多くはA地点で検出された遺構と関連するものであるが、特に今回新たに確認されたB地点東側の古墳時代の河川跡とC地点中流部の浅い溝跡が特徴的であり、X-1及び黒色土遺物包含層は、本遺跡が立地する自然堤防溝跡の開削や地形変化の痕跡を知る上で注目されるものである。

河川跡は、A・B・C地点を合わせて、40軒(溝15-22号住居跡は欠番)が調査されている。これらの住居跡は、調査区の小島部から西側に集中しており、住居跡周辺の遺構が密しく、女塚川中流部の自然堤防上に立地する遺跡の一面のみならずを示している。遺構は、古墳時代前期(第5-6-11-16-19-20-24-25-26-27-28号住居跡)、中期2軒(第16-40号住居跡)、後期3軒(第1-2-3-4-7-8-10-12-13-14-17-21-22-29-30-33-34-37-38-39号住居跡)、不明5軒(第9-23-24-27-40-41号住居跡)であるが、各時期とも時期層が認められ、時期によって住居跡の多寡はあるものの、前期～後期にかけて比較的連続して築かれた集落であったと推測される。

土坑は、A・B地点で4基報告されているが、その性質や時期が明確なものはない。土坑の形態は様々であるが、A・B地点とも調査区中央部から西側の住居跡が密集する地域では比較的整った形態のものが数立っているのに対して、A地点の調査区東部では平塚部の土層が南西から北東方向に傾斜に急化する様子が見られる。このA地点調査区東部に集中する平塚部の土層部は、南側のB地点東部で検出された古墳時代の同一後期の河川跡の周辺に近く、また古墳時代後期の上層を出したものの(第29-39-38号土層)の直上、河川一般道かしの河原田高村の野塚(第20号土層)や坂本の磯舟(第23号土層)を出土したものがあり、河川跡に関連する重要な存在にかかわるものである可能性も考えられる。

溝跡は、A・C地点で3基報告されており、時期は古墳時代前期1基(第7号溝跡)～後期3基(第5-11-16号溝跡)、古式2基(第4-12号溝跡)、中期以降は第1(第1-2-3-6-8-9-10-13-14-24-31-36号溝跡)である。古墳時代前期の第7号溝跡は、A地点でその直上より多数の上層が出土し、その形態より河川開削の可能性も指摘されているが、今回のC地点の調査でもその確認は得られなかった。古墳時代後期の可能性が高いと考えられる第1号溝跡は、その形態や周辺部のピットの状態から、瓦土貯り土器遺跡で「竈(炉等)を築き行う御宇等のような遺跡の跡」(池本1998)と推定された河川開削遺跡との類似性が指摘されている(宮田他2008)。この河川開削遺跡に類似する遺構は、女塚川中流部の古墳時代後期の遺跡である元玉町南宮町跡B地点(注1)・北宮遺跡(注2)・浅草橋遺跡

跡(遺跡)などでも輸出されており、比較的南西の大きな集落に存在するようである。その他の遺跡では、A地点とB地点の調査区東側で輸出された中世以前の可読性が高い遺物は調査跡が注目される。この遺跡の遺跡は、本遺跡南西の赤川部が認められる集落跡地帯の東西方向の経線にはほぼ一致するもので、この部の遺跡上層を覆っている高知前期中頃の積層層(土層(C地点層・本層V層))の形成層区とともに、当地域の集落跡地帯の形成が古代に遡上することを推測させるものである。

河川跡は、A・B地点の調査区西縁とB地点の調査区東側で発見されているが、調査区西縁の河川跡は本遺跡のすぐ西西を流れている須女川の改修前の河川跡である。B地点調査区東縁の河川跡は、古知期の中晩一後期の河川に存在していたもので、その位置が集落の縮小時期とはほぼ同時した時期であることは注目される。

本遺跡が占拠する自然地形上の位置は、古知時代前期になってより本遺跡の川越地帯に出現する。この最終に形成された集落は、比較的小規模な集落と認められるが、区内地方や東西両部伊勢湾東部の長距離をもつ土器を多く伴っており、その出自が注目される。その後期段階には川越地帯から北東の地帯集落まで取引網が拡大し、異なる集落内の人口増加によるものと思えるほど住民数が増加して大規模集落を形成するようになる。中晩の和泉期前半には、さらに本遺跡東側の積層地帯にまで集落が広がり、自然地形のほぼ全域に取引網が拡大する。この時期の集落は、他の遺跡に比べて鉄器や磁器を占める住民数が多く、また積層層より地帯(土層I)の部が居住区では開口が西へしており、集落内に小政治をもつていたことが推測される。後期後半では、鉄の産出と同様にほとんどの住民にオヤマが付与されるが、後期地区では住民数がかなり減少し、集落の中心は南西の川越地帯や積層地帯の方に移動するようである。後期の後半期では再び積層地帯に集落の中心が移動し、川越地帯や積層地帯の住民数は減少するが、後期前期には集落全体の規模が縮小し、川越地帯や積層地帯に再集住層が集中的に存在する。

このように本遺跡が占拠する自然地形上の位置は、低地内の古知時代集落の中では比較的早く形成され、その後大規模な集落が後期の後半期まで継続して営まれていたことや、甲斐管・石狩・秋田産・白武産土器等の各時期における特徴的な遺物が後の遺跡に及んで調査であることなどから見て、玄界川中流域の中心的存在であったことがあかぬ。

#### 註

- (1) 1967年に玄界川流域調査会が川越地帯に於て調査調査を実施し、調査報告書『玄界川流域調査報告書』(1967)に於て報告されている。
- (2) 1969年玄界川流域調査会が川越地帯(土層II)の調査調査を実施し、調査報告書『玄界川流域調査報告書』(1969)に於て報告されている。また、河川に調査した河川(遺跡)とそれらからの調査調査データ(河川跡)の調査調査報告書(1969)に於て報告されている。
- (3) 調査調査の北西側の300mに位置する川越地帯に於ける調査調査で、1969年に玄界川流域調査会が調査調査報告書(1969)に於て報告されている。調査調査報告書(1969)に於て報告されている。
- (4) 1970年調査調査報告書(1970)に於て報告されている。調査調査報告書(1970)に於て報告されている。調査調査報告書(1970)に於て報告されている。

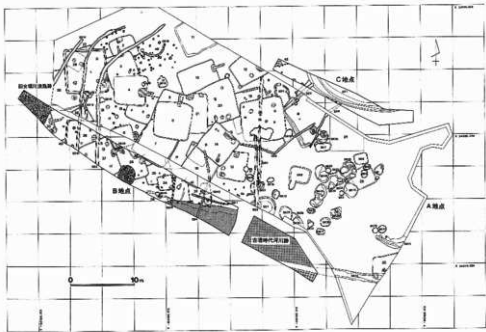


图1图 久城遗址A·B·C地点全图

# 第IV章 検出された遺構と遺物

## 第1節 住居跡

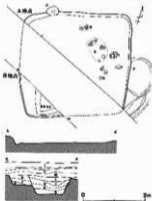
### 第6号住居跡 (第4図)

本住居跡は、直交の定常型平床式で、A地点で調査されている。今回の現地調査の結果では、住居の東西コーナー部分が検出され、不明瞭であった本住居跡の形態や規模がほぼ明らかとなった。

平面形は方形を呈し、北壁は東門方向3.45m・南壁方向3.32mを測る。幅員から推定は、A地点西で70cm・東壁西側で30cmある。柱列の軸方向は不明であるが、東西方向はA-70°程度となる。

北壁はほぼ平床をなし、やや陥入及び階差等の供給内施設はまったく確認されていない。北壁西で検出された住居の東西コーナー部の内縁は、築地石土層によって現れている。

出土遺物は、A地点西で瓦葺陶の土器(第5図1・2・4・5)と壺形刺にアと考えられる土器(第5図3・6・7・8)が出土している。これらの埋蔵層も土層は、A地点の調査書でほかの他には南側より高い位置で検出されており、二次的に設置されたもの、と一併して考えられている。しかし、それらの土器の出土状況とみると、瓦葺陶の土器は併用施設を主体とし、壺形刺の土器は壁上の確認施設を主体としている。このことから、瓦葺陶の土器は本住居跡に併用されたものに近いものと思われる。壺形刺の土器は本住居跡が築地された後に設置されたものとして分類できるであろう。本住居跡の時期は、遺物の出土状況より、古墳時代前期(古墳期)のものと考えられるのが妥当である。



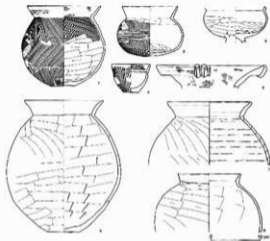
第4図 第6号住居跡

#### 第6号土層土層説明

- 第1層：築地土層 (築地石を敷き詰め、和瓦に覆み、しませる層。)
- 第2層：埋蔵土層 (ホーム型土層・築地石を敷き詰め、和瓦に覆み、しませる層。)
- 第3層：埋蔵土層 (ホーム型土層を敷き詰め、和瓦に覆み、しませる層。)
- 第4層：埋蔵土層 (ホーム型土層を敷き詰め、和瓦に覆み、しませる層。)
- 第5層：埋蔵土層 (ホーム型土層・ホーム型土層を敷き詰め、和瓦に覆み、しませる層。)

#### 第6号住居跡土層説明

- 第1層：埋蔵土層 (ホーム型土層を敷き詰め、和瓦に覆み、しませる層。)
- 第2層：埋蔵土層 (ホーム型土層を敷き詰め、和瓦に覆み、しませる層。)
- 第3層：埋蔵土層 (ホーム型土層を敷き詰め、和瓦に覆み、しませる層。)



第5図 第6号住居跡出土遺物（富田館1983より）

#### 第7号住居跡（第4区）

本住居跡も、すでにA地点で住居北側の火子が調査されている。B地点で検出されたのは、本住居跡の南西壁の一部である。本住居跡は多数の住居跡と重なり合っているが、A地点の第5号住居跡とB地点の第4号住居跡に切られ、A地点の第6号住居跡・第9号住居跡とB地点の第4号住居跡・第5号住居跡を切っている。

平面形は方形を呈し、規模は南西-北東方向3.10m・南東-北西方向は概定で3.00m位を測るものと思われる。押部土からの深さは18cmある。住居の土壁方向は、コマダが住居の北東側壁にあったものと推測されることから、南西-北東方向のクレープをとりとえらる。

平面は若干の起伏があるようで、比較的広範囲に土の分布が見られる。壁土は北西壁下と南東壁下に見られ、住居内部が位置する南東壁下には認められない。

出土遺物は、A地点の住居発掘より、壺・丸形壺・小形壺・鉢・杯が出土している。本住居跡の時期は、出土遺物より古墳時代前期（晩古墳）と考えられる。

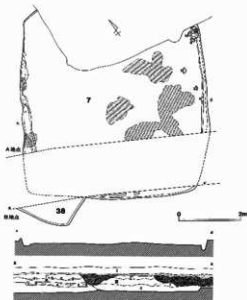


図6 図7号住居跡

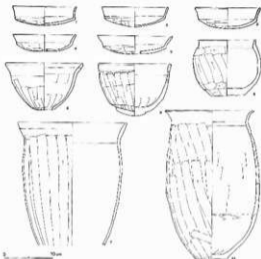
**図7号住居跡土層説明**

- 第1層：灰褐色土層（ホームブロックを敷き詰めた、地中に露み、しまり土層である。）
- 第2層：灰褐色土層（ホームブロックを敷き詰めた、焼土粒子を散見する、地中に露み、しまり土層である。）

**図8号住居跡土層説明**

- 第1層：褐色土層（焼土粒子を散見する、地中に露み、しまり土層である。）
- 第2層：灰褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を散見する、地中に露み、しまり土層である。）
- 第3層：灰褐色土層（焼土粒子を多量に、焼土粒子を散見する、地中に露み、しまり土層である。）
- 第4層：褐色土層（ホームブロック・焼土粒子を散見する、地中に露み、しまり土層である。）
- 第5層：褐色土層（ホームブロックを敷き詰めた、地中に露み、しまり土層である。）
- 第6層：褐色土層（焼土粒子・炭化粒子・ホームブロックを散見する、地中に露み、しまり土層である。）





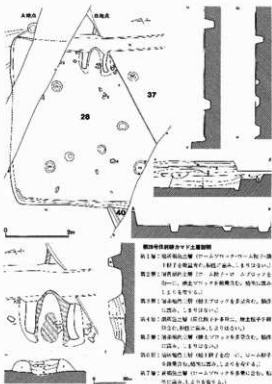
第7図 第7号住居跡出土遺物（宮田他1985より）

#### 第28号住居跡（第8図）

本住居跡は、A地点の調査で住居の北東コーナー部分が掘出されていたが、今回の発掘点の調査で住居跡の大半が掘出され、不明確であった本住居跡の形や規模と時期がほぼ明らかとなった。本住居跡は多数の住居跡と重複しており、A地点で第20号住居跡多、B地点で第10号住居跡を切り、B地点で第27号住居跡と中央の第3号住居跡に切られている。

平面形状は、住居の南東角を除く住居跡に切られているため完全には不明であるが、比較的整った方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向約20m・南北方向は4.80mまで測れる。主軸方位は $N-97^{\circ}-E$ をとる。

断面は上下2層構造をた。最上層の厚さの上3~4cmに黒い土が貼り残されている。上下の床面とも比較的平坦で、全体的に南北に傾斜である。この上下の床面は、カマシや柱石の位置が同じであり、また住居の配置も認められないことから、捨て土しによるものではなく、異なる体の張り式



**第29号住居跡のレイアウトと土層説明**

- 第1層：地床掘削土層（ホームブロッカーホーム掘削面）  
（貯り土層に由来、形状が乱れ、土質はよい。）
- 第2層：埋土層の土層（ホームブロッカーホーム掘削面）  
（同一に、埋土ブロッカーが散見する、形状は乱れ、土質はややわる。）
- 第3層：埋土層の土層（埋土ブロッカーを多用する、形状は乱れ、土質はややよい。）
- 第4層：埋土層の土層（埋土ブロッカーを多用する、埋土は乱れ、土質はややよい。）
- 第5層：埋土層の土層（埋土ブロッカーを多用する、形状は乱れ、土質はややよい。）
- 第6層：埋土層の土層（埋土ブロッカーを多用する、形状は乱れ、土質はややよい。）
- 第7層：埋土層の土層（埋土ブロッカーを多用する、形状は乱れ、土質はややよい。）
- 第8層：埋土層の土層（埋土ブロッカーを多用する、形状は乱れ、土質はややよい。）

図29 第29・40号住居跡

しと考えられる。虫蝕穴は、ボートの形盤・短盤・浅盤等から円形・4角のイボ状穴穴と認められる。貯蔵穴は奥面区内では確認されていない。虫溝は、付録の表裏のみに見られる。

オマツは、家産物のほぼ中央に位置し、埋蔵部を築く円筒状と受け皿状盤部に似られている。腹縁は、最大幅100mmを測る。腹は比較的太くしっかりしており、ホームブロッツを主体とする黄褐色土を盛り上げて作られている。熱地帯に産出をせず、限りなく平野に産出しており、前面は高く傾いている。熱地帯・埋蔵部内産は、前面に高く傾けて着色している。

出土遺物は、安(1)・大型盤(2)・坪(3・4)・イボイシユア(5)・8割支脚(6)・土製紡錘車(7)などが、オマツ内やオマツ附近の深部部産から出土している。これらのうち土器は、実製品はなく、すべて断片である。本位産物の種類は、縄文時代前期(縄文期)である。



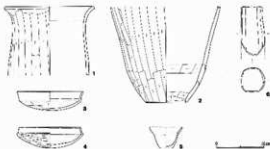
第9図 第2号位産物  
出土土器断片

#### 第2号位産物土器断片

- 第1層：埋蔵部近し型(短盤・ホーム型子・皿)断片を主体とし、熱地に産み、しよりを有する。
- 第2層：埋蔵部近し型(ホームブロッツ)を主体とし、熱土型子・浅盤型子を主体とし、熱地に産み、しよりを有する。
- 第3層：埋蔵部近し型(ホーム型子)を主体とし、埋蔵部近し型(短盤)を主体とし、熱地に産み、しよりを有する。

#### 第3号位産物土器断片

- 第1層：埋蔵部近し型(ホーム型子・皿)断片を主体とし、熱地に産み、しよりを有する。
- 第2層：埋蔵部近し型(ホーム型子)を主体とし、埋蔵部近し型(短盤)を主体とし、熱地に産み、しよりを有する。
- 第3層：埋蔵部近し型(ホーム型子)を主体とし、熱地に産み、しよりを有する。



第10図 第2号位産物出土遺物

第22号住居跡出土遺物調査表

品 種	品 名	形態・遺物平法の概要	製 法 の 概 略	土 色 類 別	備 考
1	土 器 ①(2.5cm)	粘土質の土で成形。口縁部は厚く外に出ている。底部はあまり厚くない。	口縁部内側を叩き出す。底部を外側から叩き出す。	灰白色-赤褐色 内側-赤褐色 内側-灰褐色	的5/L
2	土 器 ②(3.5cm)	粘土質の土で成形。口縁部は厚く外に出ている。底部は厚く出ている。	口縁部内側を叩き出す。底部を外側から叩き出す。	灰白色-赤褐色 内側-赤褐色 内側-赤褐色	的5/L
3	土 器 ③(4.5cm)	口縁部は厚く外に出ている。口縁部は厚く出ている。底部は厚く出ている。	口縁部内側を叩き出す。底部を外側から叩き出す。	灰白色-赤褐色 内側-赤褐色 内側-赤褐色	的5/L
4	土 器 ④(4.5cm)	口縁部は厚く外に出ている。口縁部は厚く出ている。底部は厚く出ている。	口縁部内側を叩き出す。底部を外側から叩き出す。	灰白色-赤褐色 内側-赤褐色 内側-赤褐色	的5/L
5	土 器 ⑤(4.5cm)	口縁部は厚く外に出ている。口縁部は厚く出ている。底部は厚く出ている。	口縁部内側を叩き出す。底部を外側から叩き出す。	灰白色-赤褐色 内側-赤褐色 内側-赤褐色	的5/L
6	土 器 ⑥(4.5cm)	口縁部は厚く外に出ている。口縁部は厚く出ている。底部は厚く出ている。	口縁部内側を叩き出す。底部を外側から叩き出す。	灰白色-赤褐色 内側-赤褐色 内側-赤褐色	的5/L
7	土 器 ⑦(4.5cm)	口縁部は厚く外に出ている。口縁部は厚く出ている。底部は厚く出ている。	口縁部内側を叩き出す。底部を外側から叩き出す。	灰白色-赤褐色 内側-赤褐色 内側-赤褐色	的5/L

第22号住居跡 (第1区)

本住居跡は、北端の隅に北東に位置する。住居中央部を第4号溝跡・第7号溝跡や第4号土器に覆われ、北に土器を第1号土器跡、南側壁を古墳時代の河川跡によって切られている。住居跡の遺存状態はあまり良好とはいえない。

平面図は北西角の隅を覆うものと認められ、幅は東西方向3.50m・南北方向に3.40mまで覆われる。厚さ面からの厚さは3m前後である。土器方位は、5-10°程度を占める。

平面図は、全体の約半分で破綻である。これは、住居中央部の南東寄りには位置する。形跡は第4号土器や溝跡によって切られているため不明であるが、覆り込みをもち、丸底の形跡が認められているだけの土器跡である。住居内よりピットが3箇所確認されているが、土器の形跡に接するものはない。幅員は、北東区内で確認された埋土には見られない。

出土遺物は、土器が多く出土しているが、土器の大部分が破れたものはない。第1区に埋められた土器は、第2区に埋められたものと同様に、土器の破片が見られるものである。赤褐色の土器は、出土遺物より、古墳時代前期(古墳期)と考えられる。



第11図 第22号住居跡出土遺物

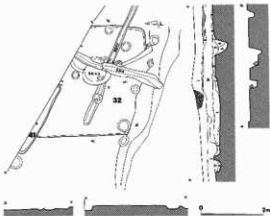


図12図 第32号住居跡

**第32号住居跡土層説明**

図1層：特別粘土層（ローム粘土全均）に、焼土粒子を散らしてあり、内側に盛り、土まきを施す等。）

図2層：特別粘土層（ローム粘土）を焼土層より、焼土に盛り、土まきを施す等。）

**第4号住居跡土層説明**

図3層：特別粘土層（ローム粘土）焼土粒子を散らしてあり、内側に盛り、土まきを施す等。）

図4層：特別粘土層（ローム粘土）焼土粒子を散らしてあり、焼土層より、焼土に盛り、土まきを施す等。）

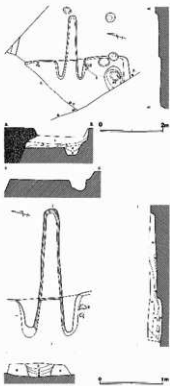
図5層：特別粘土層（ローム粘土）全均（土まき、焼土に盛り、土まきを施す等。）

**第32号住居跡土層説明**

図6層：特別粘土層（ローム粘土）焼土粒子を散らしてあり、ローム粘土層より、焼土に盛り、土まきを施す等。）

**第32号住居跡跡土層観察表**

層 番	厚 度	特 徴	採取・識別方法の特長	識別方法の特長	土 質 類 別	備 考
1	約 5.0m		粘土層厚が上層部、次第 に薄くなる等がある。	外観上は均質粘土層の様 なす、均質です。	均質粘土層 焼土層 内層部	図12図、 図13図、
2				外観上は均質粘土層、内 層部です。	均質粘土層 焼土層 内層部	図12図、 図13図、



第13圖 第23号住居跡

第23号住居跡出土遺物

- 第1層：粘板岩地層 (F1-A) 粘土・砂質土層。土、粘土質土層。粘板岩地層、土層を有する。
- 第2層：粘板岩地層 (F2) 粘土・砂質土層。土、粘土質土層。粘板岩地層、土層を有する。
- 第3層：粘板岩地層 (F3) 粘土・砂質土層。土、粘土質土層。粘板岩地層、土層を有する。
- 第4層：粘板岩地層 (F4) 粘土・砂質土層。土、粘土質土層。粘板岩地層、土層を有する。
- 第5層：粘板岩地層 (F5) 粘土・砂質土層。土、粘土質土層。粘板岩地層、土層を有する。
- 第6層：粘板岩地層 (F6) 粘土・砂質土層。土、粘土質土層。粘板岩地層、土層を有する。

第23号住居跡の地下土層

- 第1層：粘板岩地層 (F1-A) 粘土・砂質土層。土、粘土質土層。粘板岩地層、土層を有する。
- 第2層：粘板岩地層 (F2) 粘土・砂質土層。土、粘土質土層。粘板岩地層、土層を有する。
- 第3層：粘板岩地層 (F3) 粘土・砂質土層。土、粘土質土層。粘板岩地層、土層を有する。
- 第4層：粘板岩地層 (F4) 粘土・砂質土層。土、粘土質土層。粘板岩地層、土層を有する。
- 第5層：粘板岩地層 (F5) 粘土・砂質土層。土、粘土質土層。粘板岩地層、土層を有する。
- 第6層：粘板岩地層 (F6) 粘土・砂質土層。土、粘土質土層。粘板岩地層、土層を有する。



第14圖 第23号住居跡出土遺物

### 第23号住居跡（第15図）

本住居跡は、井原市の調査区北部に位置する。調査区内では住居の一部が検出されたのみであるが、住居跡の西側を新川の河川川筋によって隔られている。

住居跡の一部しか検出されていないため、平面形や規模は不明である。調査区からの深さは25m前後を測る。土層状況は、コマツの位置からN-7B-1区をとるものと考えられる。

断面は全体的に平土で、比較的平坦である。断面は調査区内で検出された層下には見られない。住居に伴うピットは、住居の西側コーナー部付近に位置するP-1だけである。P-1は、2段に深く掘っており、床面からの深さは34cmを測る。

コマツに、住居の東側壁に位置し、壁に対してほぼ直交に付設されている。規模は、全長200cm・最大幅90cmを測る。壁は、ローンプロックを主体とする焼成褐色土を塗料上げて構築したもので、比較的太くしっかりしている。焼成部は、巴瓦の壁を覆う程度のもので、焼成部は床面とはほぼ同じである。内面は白く焼けて着色されている。埋没部は、焼成部より一段高く、ほぼ水平に住居外へ傾いている。

出土品類は、比較的少ないが、コマツ周辺の調査上より高砂(1)や高砂(2)等の土器片が調査出土している。本住居跡の時期は、古墳時代前期(晩古墳)である。

### 第23号住居跡出土品類調査表

品	品	品	品	調査・発掘方法の特徴	調査方法の特徴	出土品類	備考
1	住居跡	住居跡西側 (17.5m)	住居跡西側 (17.5m)	住居跡の西側に位置する。埋没部はあまり露出しない。	住居跡の西側コンクリート、焼成部内側コマツ。焼成部外側コマツの埋没部、内側コマツ。	高砂(1)の土器片	15点
2	ピット	住居跡西側 (12.4m) 高砂(1.0m)	住居跡西側 (12.4m) 高砂(1.0m)	住居跡の西側に位置し、住居跡にある。住居跡内側しながら開き、高砂の焼成部が露出する。	住居跡の外側コマツ、住居跡の内側コマツ、内側コマツ。	高砂(1)の土器片	住居跡の西側、高砂(1)の土器片類

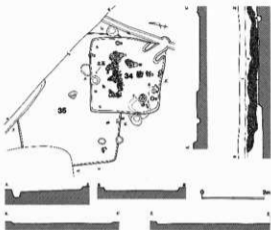
### 第24号住居跡（第16図）

本住居跡は、井原市の調査区中央部に位置する。埋没する住居跡住居跡をとり、コマツの一部を調査の場によって隔られている。住居跡の上層は近年の削平を受けており、遺存状態はあまり良好とは評さない。

平面形は、長方形で壁一方が欠ける。規模は、東面方向が20.0m・西面方向が22.0mを測り、かなり小型の住居である。調査区からの深さは10m前後ある。土層状況は、N-7B-1区をとる。

断面は、全体的に平土で比較的平坦である。住居中央部では、比較的成層列から露出した土層物が深く奥面に露出した状態で検出されている。ピットは住居内より2箇所検出されているが、本住居跡に伴うものはP-1だけである。断面は各壁とも存在しない。

コマツは、住居の南側コーナー部に、壁を若干傾り込んで付設されている。規模は、全長300cm・最大幅70cmを測る。壁は、ローンプロックを主体とする焼成褐色土を塗料上げて構築している。焼成部は、床面を若干傾りくぼめて焼成部としており、内面は白く焼けている。埋没部は、すでに既



**第35号住居跡止層説明**

第1層：粘土板瓦土層（ローム瓦葺き・溝土瓦葺き跡等存在、瓦葺き跡のみ、土層不全等。）

**第34号住居跡跡カマド土層説明**

第1層：粘土板瓦土層（溝土瓦葺き跡等存在、瓦葺き跡のみ、土層不全等。）  
 第2層：厚板瓦土層（ローム瓦葺き跡のみ、溝土瓦葺き・厚板瓦葺き跡等存在、瓦葺き跡のみ、土層不全等。）

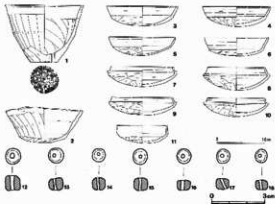
第3層：粘土板瓦土層（ローム瓦葺き跡等存在、瓦葺き跡のみ、土層不全等。）

第14図 第34・35号住居跡



ずまれているため不明である。

両手遺物は、位部の両出土より小形多孔器(1)・鉢(2)・杯(3-11)などの青彩の上器が比較的多く出土しており、土器以外では住居北側中央の位部より、土器の小土器が例によって出土している。中住居跡の時期は、古墳時代後期(属古墳期)である。



第16図 第34号住居跡出土遺物

第34号住居跡出土土器調査表

品	種	種	量	形態・成形手法の特徴	装飾手法の特徴	出土位置	備
1	小形多孔器	口徑	14.10	粘土質厚土上中成器。口縁部の両面より位部跡に属する。口縁部に細く刻す。底面に細く、多孔状を有する。	口縁部内面をツツテ、底面をツツテ、内面をツツテ。	片立板・赤褐色	位部跡より
		高さ	5.0				
		底径	5.8				
2	鉢	口徑	14.0	粘土質厚土上中成器。口縁部の両面より位部跡に属する。底面に細く、多孔状を有する。	口縁部内面をツツテ、片立板をツツテ、内面をツツテ。底面をツツテ、内面をツツテ。	片立板・赤褐色	位部跡
		高さ	5.0				
		底径	5.0				
3	杯	口徑	11.0	口縁部を装飾的に片立す。片立部に細く、多孔状を有する。	口縁部内面をツツテ、片立部をツツテ、内面をツツテ。	片立板・赤褐色	位部跡
		高さ	4.1				
4	杯	口縁部径	11.2cm	口縁部を装飾的に片立す。口縁部内面を装飾的にツツテ、片立部に細く、多孔状を有する。	口縁部内面をツツテ、片立部をツツテ、内面をツツテ。	片立板・赤褐色	位部跡
		高さ	5				
		底径	4.2cm				

番	番	法	形	形	形	形	形	形	形	形
5	16	11号 11.0 専攻 3.0	1) 胎盤はやや内傾するに傾斜する。胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。
6	16	11号 11.0 専攻 3.0	1) 胎盤はやや内傾するに傾斜する。胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。
7	16	11号 11.0 専攻 3.0	1) 胎盤は強く内傾して内傾し、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。
8	20	11号 11.0 専攻 3.0	1) 胎盤は胎盤の内傾し、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。
9	25	11号 11.0 専攻 3.0	1) 胎盤は強く内傾し、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。
10	16	11号 11.0 専攻 3.0	1) 胎盤は強く内傾し、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。
11	16	11号 11.0 専攻 3.0	1) 胎盤は強く内傾し、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。	1) 胎盤の内傾が少なく、胎盤は強く、胎盤は太厚を呈する。

### 第16号住居跡（第15図）

本住居跡は、当地地の調査区中央部に位置し、遺存する古墳時代後期の第7号古墳跡・第16号住居跡・第17号住居跡に接している。土質の調査近くまで掘削による調査を受けており、遺存状態は良好である。

平面等は、住居跡の北東部が調査区外に位置するため全体は不明であるが、調査区内で検出された部分から推測すると、東西壁に並べて西側壁がやや短い白土製の長方形を呈するものと思われる。南壁からの深さは、長さで5mある。北壁は、東西方向0.20m・南北方向1.20mを測る。北壁は、第一のアーチとなる。

断面は、全体に平らでなし、比較的堅固である。土質や土質などの調査は見られない。北は、住居中央部に位置し、掘り込みをもちいるに調査が検出しているだけの調査である。

出土遺物は、少量の土器片が出土したものである。本住居跡の時代は、掘削の断面や出土遺物より、古墳時代後期（5世紀）のものと考えられる。

### 第17号住居跡（第17図）

本住居跡は、当地地の調査区中央部に位置する。住居跡の北東部に接しにより不明な。調査区に古墳時代の住居跡に接しており、遺存状態は良好である。また、調査区中央部を古墳時代後期の第17号古墳跡によって埋められている。

調査区内で掘出されたのは、住居跡のごく一部であるため、住居跡の全体は不明である。断面は、

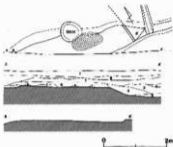


図17 第16号位遺跡

平野で比較的平坦である。跡は、遺跡中央部のやや北寄りには置かる。掘り込みをもたない単に断面が掘けただけの地床跡である。

出土遺物は、少量の土器片が出土しただけであるが、いわゆる「伊勢型二重口鉢蓋」に類似する蓋の破片(№1)が出土している。本位遺跡の時期は、住友跡の形勢や出土遺物より、古墳時代後期(古銅器)のものと思われる。



図18 第16号位遺跡出土遺物

#### 第17号位遺跡出土品調査表

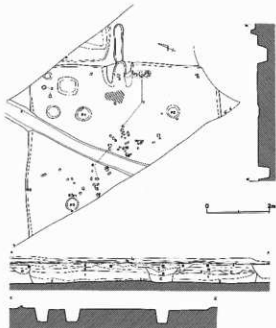
№	種 類	出 土 量	形態・造型手法の特徴	調査手法の特徴	出土位置	備 考
1	蓋	1片(破片) (20.5cm)	紅土焼成の二重口。口縁部は二重口縁と思われる。 口縁部は平造り蓋をもち、上下にやや膨張する。	1) 埋没内掘り調査。口縁部には1次工法による削り出しを認める。	赤色土・赤色土	1) 焼成した内面に黒炭あり。

#### 第17号位遺跡 (第16号)

本位遺跡は、所在地の調査区中央部のやや北寄りに位置する。南側する遺跡群住友跡と第16号位遺跡を境り、住友中北部を中央の東西約20mによって区切られている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面は、従来の東西両半分が調査区以外であるため完全に不明であるが、調査区内で検出された部分や1柱穴の配置から推定すると一辺約10mの方形を呈するものと見られる。残構は、北西-南東方向約30m・北東-南西方向は15.40mまで残れる。調査区からの深さは、最深で20mある。主軸方位は、N-60°-Eをとる。

断面は、全体的に平造り。住友中北部に比較的平坦である。キマド穴(口部の前の断面)には炭化物の分布が見られる。主軸穴は、4番主軸と考へられ、調査区内ではP1-1P3の3箇所が検出さ



第27号住居跡土層説明

**第1層：埋蔵褐色土層(鉄屑・ローム粒子多量)** (一、焼土粒了・炭化粒子多量を含む、鉄屑に富み、しまり多くなる。)

第2層：埋蔵褐色土層(鉄屑・炭化粒子・炭化粒子多量を含む、鉄屑に富み、しまり多くなる。)

第3層：埋蔵褐色土層(炭化粒子多量を含む、鉄屑に富み、しまり多くなる。)

**第4層：埋蔵褐色土層(鉄屑多量に、炭化石・炭化粒子多量)** (一、鉄屑、炭化に富み、しまり多くなる。)

第5層：埋蔵褐色土層(鉄屑・炭化粒了多量) (一、焼土粒子・ローム粒了多量を含む、炭化に富み、しまり多くなる。)

第6層：埋蔵褐色土層(鉄屑・炭化粒了一級土粒子・鉄屑多量) (一、鉄屑、炭化に富み、しまり多くなる。)

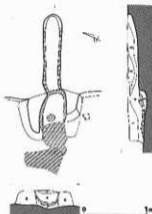


図20 新37号住居跡カマド

れている。いづれも内径20cm—25cmの円形を呈し、床面からの深さは35cm—40cmを測り、類似した形制を呈している。扉穴は、カマド左側の住居北側コーナー部付近に位置する。44cm×38cmの長方形を呈し、扉板に平足で扉面からの深さは25cmある。壁溝は、調査区内で検出された各壁下には見られない。

カマドは、住居北東壁の中央に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長2m・最大幅1mを測る。壁は、比較的太くしっかりしており、ローンプロックを主体とする結核面黄土を盛り上げて構築している。右側縁の北東部に、すでに中世のピットによって切られており、残存していない。北側縁は、壁を覆う足もない状態で、断面周は断面とはほぼ同一である。内面は奥く凹んでおり、中央部には幅30cmの小形鉢を伏せて支脚に転用している。扉溝型は、北側部より一段高く、住居外にほぼ水平に垂びている。

出土遺物は、土器片が比較的多く出土しているが、文相品は少ない。このうちの施1・2・3・11は、カマド構造や扉付コーナー部付近の床面より出土し、中世以降に伴うと考えられるものであるが、他は住居中央部の壁土中より出土しており、住居発掘後に採取されたものと思われる。中世前期の埴輪は、古墳時代後期(亀岡期)のものである。

#### 新37号住居跡カマド土器調査

- 施1器：厚肉土器（ローンプロックを主体とした、中世以降のものと思われる。）
- 施2器：厚肉土器（施1に似て中世以降のものと思われる。形状に異なり、中世以降のものと思われる。）
- 施3器：結核面黄土器（ローンプロックを主体とした中世以降のものと思われる。形状に異なり、中世以降のものと思われる。）
- 施4器：結核面黄土器（施1に似て中世以降のものと思われる。形状に異なり、中世以降のものと思われる。）
- 施5器：厚肉土器（施1に似て中世以降のものと思われる。形状に異なり、中世以降のものと思われる。）
- 施6器：厚肉土器（施1に似て中世以降のものと思われる。形状に異なり、中世以降のものと思われる。）
- 施7器：結核面黄土器（施1に似て中世以降のものと思われる。形状に異なり、中世以降のものと思われる。）
- 施8器：結核面黄土器（ローンプロックを主体とした中世以降のものと思われる。形状に異なり、中世以降のものと思われる。）
- 施9器：結核面黄土器（ローンプロックを主体とした中世以降のものと思われる。形状に異なり、中世以降のものと思われる。）
- 施10器：結核面黄土器（ローンプロックを主体とした中世以降のものと思われる。形状に異なり、中世以降のものと思われる。）
- 施11器：結核面黄土器（ローンプロックを主体とした中世以降のものと思われる。形状に異なり、中世以降のものと思われる。）



0 1cm



図2 図1号住居跡出土遺物

図1号住居跡出土遺物整理表

№	器 種	形 態	形態・成形手段の特徴	断面手段の特徴	土 色	備 考
1	壺	口径20.7 全高 33.5cm	胎土は粘土の成形、1枚板 で裏打ちの器に成形する。 胴部はともや裂けりなし。	1枚板の内面をツツテ、内 面をツツテ、内面をツツテ。	片赤土-赤褐色 内色赤 内外-赤褐色	1/8。 片赤土の器用 あり。
2	鉢	口径23.4 全高 11.7 底径 11.4	胎土は粘土の成形、片板 の内面をツツテ、1枚 板で裏打ちの器に成形す る。胴部は下縁を裂ける。	1枚板の内面をツツテ、内 面をツツテ、内面をツツテ。 底面をツツテ。	片赤土-赤褐色 内色赤	1/8の形。 片赤土に裏 打ちあり。
3	鉢	口径23.4 全高 11.1 底径 11.7	胎土は粘土の成形、1枚 板の内面をツツテ、1枚 板で裏打ちの器に成形す る。胴部は片赤土 成形する。	1枚板の内面をツツテ、内 面をツツテ、内面をツツテ。 底面をツツテ。	片赤土-赤褐色 内色赤	1/8。 キツク内 面として 片赤土。
4	皿	口径20.7 (全径)	文様部のみをとも、1枚 板の内面をツツテ、1枚 板で裏打ちの器に成形す る。	内面をツツテ。	片赤土-赤褐色 内色赤	1/8。 内面は赤 褐色あり。
5	1.7-1.7	口径 2.7 全高 2.3 底径 2.3	1枚板で成形、1枚板の内 面をツツテ、1枚板で裏 打ちの器に成形する。	1枚板の内面をツツテ、内 面をツツテ、底面をツツテ。	片赤土-赤褐色 内色赤	1/8。 片赤土の 器用あり。
6	鉢	口径24.7 全高 11.1 底径 11.1	胎土は粘土の成形、1枚板 の内面をツツテ、1枚 板で裏打ちの器に成形す る。胴部は下縁を裂ける。	1枚板の内面をツツテ、内 面をツツテ、内面をツツテ。 底面をツツテ。	片赤土-赤褐色 内色赤 内外-赤褐色	1/8。 片赤土の 器用あり。
7	鉢	口径20.7 (全径) 全高 11.1 底径 11.1	1枚板の内面をツツテ、1枚 板で裏打ちの器に成形す る。胴部は片赤土 成形する。	1枚板の内面をツツテ、内 面をツツテ、内面をツツテ。	片赤土-赤褐色 内色赤 内外-赤褐色	1/8。 片赤土の 器用あり。
8	鉢	口径20.7 (全径)	1枚板の内面をツツテ、1枚 板で裏打ちの器に成形す る。胴部は片赤土 成形する。	1枚板の内面をツツテ、内 面をツツテ、内面をツツテ。	片赤土-赤褐色 内色赤 内外-赤褐色	1/8。 片赤土の 器用あり。

地 区 名	法 量	形 態・遺物等の特徴	調査方法の特徴	出土品類	備 考
2	溝 (33.0) 竪 0.8	1 掘削の跡やかに見られる。1 掘削の内側がコンクリート、外側は土質で、掘削は丸底を、掘削面が平ら、内径が2.0、径寸である。	1 掘削の内側がコンクリート、外側は土質で、掘削は丸底を、掘削面が平ら、内径が2.0、径寸である。	赤土・赤褐色土質の土器片	1/10
10	溝 (33.0) 竪 0.8	1 掘削の跡やかに見られる。1 掘削の内側がコンクリート、外側は土質で、掘削は丸底を、掘削面が平ら、内径が2.0、径寸である。	1 掘削の内側がコンクリート、外側は土質で、掘削は丸底を、掘削面が平ら、内径が2.0、径寸である。	赤土・赤褐色土質の土器片	1/10
11	1 掘削跡 (33.0x0.8) 2 溝 (33.0x0.8)	1 掘削の内側がコンクリート、外側は土質で、掘削は丸底を、掘削面が平ら、内径が2.0、径寸である。 2 掘削の内側がコンクリート、外側は土質で、掘削は丸底を、掘削面が平ら、内径が2.0、径寸である。	1 掘削の内側がコンクリート、外側は土質で、掘削は丸底を、掘削面が平ら、内径が2.0、径寸である。 2 掘削の内側がコンクリート、外側は土質で、掘削は丸底を、掘削面が平ら、内径が2.0、径寸である。	1 赤土・赤褐色土質の土器片 2 赤土・赤褐色土質の土器片	1/10

### 第28号住居跡 (第4図)

本住居跡は、所在地の調査区中央部に位置する。発掘するまで居住区跡と祭祀区跡が混在しているが、本居で明確に認められている遺構である。調査区内では住居の掘削ローテーションがほぼ完了しているため、本住居跡の全容は不明である。本居跡にはほぼ平土で、掘削面からの深さは13cmある。赤土遺物は、土器片が少量出土したのみである。本住居跡の状況に、以上土器中住居の分布関係より、古墳時代後葉(坐高記のもの)と考えられる。

### 第29号住居跡 (第5図)

本住居跡は、所在地の調査区中央部に位置する。住居の西側を第27号住居跡に、北側を第7号住居跡と祭祀区跡に、南側を住居によって埋められているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は不明であるが、調査区内で検出された部分から推定すると、北側の壁は三方ともくは長方形を呈するものと思われる。掘削は、北側～東側方向は4.40m・東側～南側方向は5.30mまで面



第28号住居跡出土遺物

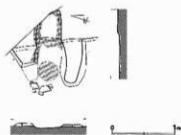
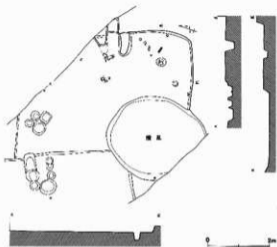


图20图 第20号住居跡



れる。築造面からの深さは、20m～30mある。走向方位は、 $N47^{\circ}E$  ほどとなる。

断面は、全体的に平削で、底部中央部は比較的平坦である。土質質と思われる部分は、底部の断面より上部傾斜されている。断面約6mの部分を望み、断面からの深さは12mを測る。

キツトは、住居の北東側壁の中央部に位置し、壁に対してほぼ直角に設置されている。厚さは、全長1.24m・最大幅0.16mを測る。壁は、状況状態が良好ではないが、比較的よくしっかりしており、ローンプロットを主体とする堆積層色土を盛り上げて構築している。左端部の北端部に、すでに崩壊している。断端部は、壁を覆やぶらない程度で、断端部は厚面とは反対側であり、内面は比較的よく残っている。溝溝部は、断端部より若干深く、住居外にはほぼ水平に深く掘びている。

出土遺物は、壁土中より土器片が少量出土しているが、実数は少ない。本住居跡の断面は、住居跡の断面や出土土層より古墳時代後期(高古期)のものと考えられる。

#### 第40号住居跡の出土遺物整理表

種別	品名	数量	形態・成形手法の特徴	製造手法の特徴	出土位置	備考
土器	丸形土器	1個(2.0)	粘土輪転み成形。口縁部は傾斜した外返し、断面は筒状。	口縁部内側にコシテア、断面傾斜ナマリ、内面磨ナマリ、底面平滑ナマリ。	内側西-西内内	1層目/1% 2層目/1% 内側-北端部
	土器	11個(1.0)	粘土輪転み成形。口縁部は傾斜した外返し、断面は筒状。	口縁部内側にコシテア、断面傾斜ナマリ、内面磨ナマリ。	内側西-西内内	

#### 第40号住居跡(第3区)

本住居跡は、集約地の調査区北側に位置し、住居跡の断面を第37号住居跡に知られている。調査区内で検出されたのは住居の北西側壁のごく一部だけであるため、住居跡の範囲は不明である。

断面はほぼ平削をなし、北西傾斜下には築造をもつ。断端部からの深さは、約15mを測る。出土遺物はなく、本住居跡の特徴は不明である。

#### 第41号住居跡(第3区)

本住居跡は、集約地の調査区中央部のやや西側に位置し、遺構する第37号住居跡を伴っている。調査区内で検出されたのは住居の北西側壁だけであるため、住居跡の全体は不明である。北側に隣接するA地区では、古墳時代後期の第17号住居跡よりも古いと判断されている第18号住居跡が検出されており、本住居跡はその第18号住居跡に属している可能性も考えられる。

断面は、北西-西南方向に約20mを測り、比較的小型の住居跡と認められる。断面は、やや起伏があり、平坦であるためやや平削である。調査区内で検出された住居の北西側壁下には、断面は見られない。断端部からの深さは、約10mを測る。

出土遺物は、土層片が数片出土しただけである。本住居跡の断面は明確にできなかったが、住居跡の断面調査からは、古墳時代後期の第18号住居跡よりも新しく、後期の第17号住居跡よりも古いものと考えられる。

### 第42号住居跡 (第24図)

本住居跡は、C地区の調査区西端に位置する。調査区内で検出されたのは住居跡のみ建物の一部とキマツドだけであり、住居跡の大部分は調査区外であるため、本住居跡の全体は不明である。

住居の主軸が北に、南西端の方向とキマツドの位置からN-100°Eをとると考えられる。基壇は、全体的に平坦で比較的明確である。基壇上には多数の焼土と炭化粒子が強く散在しており(第3層)、またキマツド東端には黒土が埋めて着色化している部分が見られることから、本住居跡は火災により焼失した可能性が高い。

キマツドは、住居の東端部に位置し、壁に対して北西方向に付設されている。総長は、全長104cm・最大幅6cmである。軸は、フォームブロックを主軸とする切角両面出しを盛り上げて構築している。焼土層は、壁を創りだすまい形跡で、焼土層は東側と北側ほどである。内面は壁面によく密着して着色化している。埋土層は、すでに大部分は既平されているが、住居外に約6cm程度残存している。焼土層よりも一段高く、ほぼ水平に築けるようである。

出土遺物は、キマツド内及びその周辺の検出物とより、面(1)・壁(2・3)・柱(4-6)などの土器が比較的まとまって盛出してている。本住居跡の時期は、それらの西土土器より古墳時代中期後半頃のものと考えられる。



#### 第42号住居跡出土遺物

- 面(1)層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第1層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第2層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第3層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第4層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第5層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第6層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第7層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第8層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第9層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第10層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第11層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第12層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第13層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第14層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第15層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第16層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第17層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第18層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第19層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第20層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。



#### 第42号住居跡カマツド出土遺物

- 第1層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第2層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第3層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第4層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第5層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第6層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第7層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第8層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第9層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第10層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第11層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第12層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第13層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第14層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第15層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第16層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第17層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第18層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第19層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。
- 第20層：焼土西上層 (面(1)壁(2)・3)・柱(4-6)など)の土器が比較的まとまって盛出してている。

第24図 第42号住居跡



第25図 第42号住居跡出土遺物

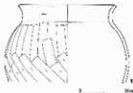
第42号住居跡出土遺物観察表

No.	種 類	寸 法	製作・成形手法の特徴	調査手法の特徴	出土位置	備 考
1	器	口径 25.0 底径 25.0	粘土の塊を上から成形、口縁部に二重の縁を打つ。	口縁部の外取ツキナシ。	内縁部・外縁部 内側・外縁部	口縁部ナシ。
2	器	口径 25.0	粘土塊の上から成形、口縁部に細やかならぬ際、口縁部は厚い。	口縁部内外取ツキナシ。縁部は縁部ハツテの縁部を打つ。内取ツキナシ。	内側部・外側部 内側・外側部	口縁部ナシ。
3	器	口径 4.5	粘土塊の上から成形、口縁部は厚い。口縁部は厚い。口縁部は厚い。	口縁部ハツテ。内取ツキナシ。縁部内外取ツキナシ。	内側部・外側部 内側・外側部	口縁部ナシ。 縁部に厚い 口縁部ナシ。
4	鉢	口径 12.4 底径 9.6 高さ 9.0	粘土塊の上から成形、口縁部は厚い。口縁部は厚い。口縁部は厚い。	口縁部ハツテ縁部的外取ツキナシ。口縁部は厚い。	内側部・外側部 内側・外側部	口縁部ナシ。 縁部に厚い 口縁部ナシ。
5	鉢	口径 14.0 底径 9.6 高さ 9.0	口縁部は厚い。口縁部は厚い。口縁部は厚い。	口縁部ハツテ縁部的外取ツキナシ。縁部は厚い。口縁部は厚い。	内側部・外側部 内側・外側部	口縁部ナシ。 縁部に厚い 口縁部ナシ。
6	鉢	口径 12.4 底径 9.6	口縁部は厚い。口縁部は厚い。口縁部は厚い。	口縁部ハツテ縁部的外取ツキナシ。縁部は厚い。口縁部は厚い。	内側部・外側部 内側・外側部	口縁部ナシ。 縁部に厚い 口縁部ナシ。

## 第2節 土 城

### 第43号土城 (第12図)

本土城は、該地点の調査区北側に位置し、遺構する古墳時代前期の第3号石室跡跡と第4号石室跡を包り、小形の第12号石室跡によって包られている。平面形は直径約6mの円形を呈し、深さ4.30mある。壙土は上下2層に分かれ、いずれも暗褐色土であるが、上層はヤーンブワックの鉄鏝を均一に含み、下層は黒土粒と炭化粒を散見含んでいる。出土遺物は、上層土層に白磁石が1個あり、壙土中より壙の壁面(1)が出土している。本土城の時期は、壙土の状態や出土遺物より、古墳時代前期(鳥辺期)のものと考えられるが、土層の性質は不明である。



第12図 第43号土城出土遺物

### 第43号土城出土遺物調査表

品 番	品 名	形態・産出部位の概要	調査手法の概要	出土位置	備 考
1	白磁石片 (約1.5cm)	壙土の壁面(1)から、1層目には出土せず、2層目には壙中に散見する。断面は薄く、	2層目内から採取。壙壁面(1)から採取。約1.5cm、約1.5cm、約1.5cm。	壙壁面(1)から採取。約1.5cm、約1.5cm、約1.5cm。	1層目、2層目の両方に出土している。

### 第44号土城 (第13図)

本土城は、該地点の調査区中央部のやや南側に位置し、遺構する古墳時代前期の第3号石室跡跡を包っている。土層土層は間伐による削りを受けている。平面形は直径約6mの円形を呈し、確認部分の深さは1.0m程度である。出土遺物は、壙土中より古墳期の土器片が少量出土している。本土城の時期は、出土土層より古墳時代前期と認められる。土層の性質は不明である。

### 第45号土城 (第4図)

本土城は、該地点の調査区中央部に位置し、遺構する古墳時代前期の第6号石室跡跡を包っている。土城の北東部中央は調査区外に位置するため、全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推定すると、方形もしくは長方形に近しい形態を呈するものと思われる。確認部分からの深さは約2mあり、壙は直線的に立ち上がり、断面は平坦を呈す。出土遺物は、壙土中より古墳期や鳥辺期の土器片が少量出土している。本土城の時期は、壙土の状態や出土遺物より古墳時代前期の可能性が強いと思われる。土層の性質は不明である。

### 第3節 清 跡

清跡は、B地点でも赤(第3・4・12・13・17・18号遺跡)とて赤土で2号(第7・8号遺跡)の跡があるが埋没されている。これらの遺土などはA地点で検出された清跡の遺構にあたるものであるが、B地点の第17・18号遺跡は半割の調査で新たに確認されたものである。時期は、古墳時代前期1巻(第7号遺跡)・前期以降(第4・12号遺跡)、中世以降(赤(第3・4・12・13・17・18号遺跡))である。

古墳時代前期の赤土の清跡は、層土中より土器を多数出土し、その状態より古墳期清跡の可塑性も考えられるものであるが、後述するように一般的古墳期清跡とはやや異なる点もあり、その判断は慎重を要する。古墳時代後期以降の第4号遺跡と第12号遺跡は、出土遺物がなく明確な時期は不明であるが、元の清跡との位置関係や土層構造の観察より、認知の可能性が高いと考えられるものである。このような遺構は清跡は、古墳時代後期の尾山丘陵に埋没した河川跡の上に埋没されており、層土中には砂が充満していた。中世以降の清跡は、比較的距離が狭く調査区域内外を南北方向に流れるものが多い。このような調査区の内外に位置する第3号遺跡と第17号遺跡は、東西の赤土の清跡の方が約20m違いが、埋没跡は幅約5m前後の範囲で両側の土層間の河川跡に平行して埋没されており、河川跡の質を運上する遺構の無蓋的な状態が推測される。

#### 第7号遺跡 (清跡)

本遺跡は、すでにA地点で東西が調査されている。今回のC地点の調査では、本遺跡の北側延長部分の一部検出されただけであり、その内容を明らかにすることはできなかった。本遺跡の北側には古墳時代前期1巻頃に埋没された土層不整の5号1があり、それによって埋められている。

断面は、古墳期清跡のような跡の手状に広がる状態を呈するが、南西側と北西側の溝は直角をなさずやや開いている。また断面の溝は、南側に1m1程を少し広がったところで接続している。断面は、北西-南東方向7m・北東-南西方向は6.5mまで確認できる。溝は、断面の溝が1幅約0.5m・北西側の溝が1幅約0.5mで断面の溝のほらがやや広いが、溝の面は両方ともほぼ同一規模である。断面の形状は、東西がほぼ近似的を呈するが、溝の断面は外側よりも内側の傾斜がやや緩やかになっている。断面からの深さは約0.5m前後を測る。北西側の溝の外側には不整を呈するナリス状の窪み張り出しが見られるが、これはC地点の土層不整の敷居層状によれば、層土が北西側溝の東側に埋没する古墳時代前期の赤土層である第8号(第12号遺跡)と同一であり、本遺跡の上面を被覆してそのまま断面に写り埋没していることから、本遺跡には埋め込まれたと考えられる。

出土遺物は、A地点別の層土中より赤・黄・小砂管・黄・赤・小砂管が赤土層の上面が多数出土しており(第7号遺跡)、赤・小砂管・黄のなかにも叩き破りの属したものがあつた。このような属土の層は、北西側溝の外側のナリス状の窪み張り出し部からの出土であり、本遺跡に埋没するものは黄砂である。今回のC地点の調査では層土中より土器が数片出土しただけである。

本遺跡は、その断面から古墳期清跡の可塑性が考えられるわけであるが、南西側と北西側溝が直角をなさずやや開いた状態を呈することや、溝の断面が外側と比べて内側の方がかなり緩やかであることなど、一般的古墳期清跡とは若干異なる点がある。また、本遺跡の北西側溝の上面から



图7号过断层剖面图

(A—A')

第1层：砾状砂质土層

第2层：砂质粘土層

第3层：砂质粘土層

第4层：流纹状土層

(D—D')

第5层：流纹状土層 (D区剖面, A剖面  
全貫通)

第6层：砾状砂土層 (D区剖面, A剖面  
全貫通)

第7层：砂质粘土層 (D区剖面, A剖面  
全貫通, 砂质粘土層, 砂质粘土層  
伴生)

第8层：流纹状土層 (D区剖面, A剖面  
全貫通)

第9层：砂质粘土層 (D区剖面, A剖面  
全貫通)

第10层：砾状砂土層 (D区剖面, A剖面  
全貫通, 砾状砂土層, 砾状  
砂土層, 砾状砂土層)

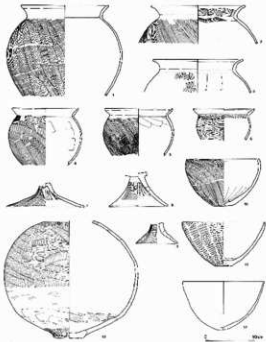
第11层：砂质粘土層 (D区剖面, A剖面  
全貫通, 砂质粘土層, 砂质粘土層,  
砂质粘土層)

第12层：流纹状土層 (D区剖面, A剖面  
全貫通, 流纹状土層, 流纹状土層,  
流纹状土層)



图27图 第7号过断层

産物のみなりびい刷毛にあり、本通縁とよより時世のない古清時代産物の土器片も多数包含する黒色土が強く混入しており、本通縁が方型地溝器であれば、その方向部或上は窪凹されてからかなり早い時期に造平あるいは蓋装したことが伺える。



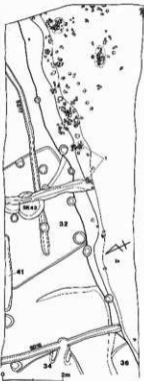
第24図 第7号清原出土遺物（宮田他1985より）

## 第4節 河川跡

河川跡は、調査区の調査区北西端と南東端の両端で検出されている。このうち北西端の河川跡は、現在の支那川の改修に伴って埋められた河川跡跡で、A地点の調査区北西端でも確認されている。

調査地の河川跡は、古墳時代中期—後期のもので、古墳時代前期の築石の付着跡と築石の付着跡を認めている。本河川跡の調査は、調査範囲が狭い上に河川跡の深さが私取断面より2mを超えることから、その調査にはかなりの敷設が伴うと判断されたため、河川跡を全調査することはあきらめ、河川跡の上層全体の調査と下層の一部を断片的に確認することにされた。

調査区内では河川跡の中央部から北西の一部が検出されているが、河川跡の埋没については、調査区が狭いため確認することができなかった。そのため河川跡の埋没については推定ではないが、調査区内の状況から推定すると、おそらく幅約30m位はあるものと思われる。瓦地断面からの深さは1.30m、築石断面からの深さは1.80mを測り、基本土層のローム上—砂地層を層を掘り込んで、その下の砂地層にまで達している。状況は、調査地の調査区内ではほぼ東西方向をとっているが、その東端部にあるA地点側では北東向きであるため明らかではない。また、河川跡の東端部にあるA地点では、河川跡よりも古い時期の前期—中期に検出される築石の付着跡や、河川跡と同程度の築石【期を3層とする】の遺跡が検出されていることから、河川跡はその前の段階に埋没する決りをする可能性も考えられる。本河川跡は、現在も遺跡のすぐ西側を流れる支那川の古墳時代における埋没か



第29図 河川跡西側調査区上層遺物出土状況



あるいはその位置と考えられるが、本遺跡より東側の下流については、現在の地表面の地形より流路の痕跡が確認できないため不明である。

層Ⅶは、中位の厚く軽い鉄分凝集層の褐色電色土(第31図第7層、第32図第7層)を境にして、上層と下層に分かれ、粘土土層も上層と下層ではその時期中位土状態に明確な相違が認められる。

上層(第31図第7～9層、第32図第7～9層)は、埋蔵面から鉄分凝集層までの深さが約70cmあり、北側の壁面は概やかに傾斜している。北面にあたる鉄分凝集層は、北側で右下上がるがほぼ平直をなしている。層Ⅶは上層の褐色粘土層と下層の砂粘層を主体とする。下層の砂粘層は、薄い砂層と厚い砂粘層が互層をなしており、比較的赤色がかったことも伺われる。上層からの粘土遺物は、亀裂層の土層を主体とし(第32図)、上層の各層から連続なく破片が多数出土している。これらの粘土土層のうち、接合によりある程度形態が窺知できるようなものは、上層の砂粘層土層からの粘土が多いが数量は少ない。

下層(第31図第10～16層、第32図第8～16層)は、埋蔵面からの深さが1.80mあり、北面は平直をなしている。北側の壁面については、部分的な調査のための破壊にできなかったが、第31図の上層断面に見られるように向かって傾れた側水筋の痕跡層が河川跡下層部分の壁面であったと考えられ、それによると比較的概やかに傾斜していたようである。層Ⅶは上層の褐色粘砂層と下層の砂粘層粘土層を主体とするが、場所によって一律ではなく、部分的に砂粘層が見られるなど、複雑な状態を呈している。特に上層の褐色粘砂層の上部には、鉄分の凝集層を帯状に含む黄褐色を帯び込み状の土層(第31図第10層、第32図第8層～9層)が見られ、下層埋没後に小規模な湧流水が流れていたことが伺える。下層からの粘土遺物は、花崗岩から黄土層の土層を主体とするが(第34～35図)、上層と違って定形品が多く出土している。また、最下層の埋蔵面褐色粘土層からは土器はまったく出土しない。これらの土器は、単一時期的ものではなく時期層が認められるものを告げるが、それらの粘土状態は層位的に整合しない。

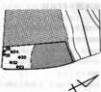
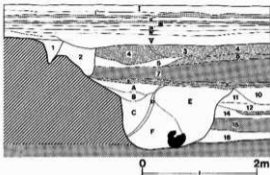


図32 河川跡下層遺物出土状態



第21図 河川脇の河床面直下土層断面図

**河川脇の河床面直下土層説明**

- 層1層：河川脇の上層（河川底140cm）砂、カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層2層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層3層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層4層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層5層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層6層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層7層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層8層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層9層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層10層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層11層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層12層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層13層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層14層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層15層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層16層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。

**土層の名称**

- 層A層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層B層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層C層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層D層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層E層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。
- 層F層：河川脇の上層（河川底140cm）砂・カームアブツクを混在させ、粘性に富み、しまりを有する。



土層以外では、創成(写真図版は1-2)・本の侵蝕(写真図版1-1)・イイの柱石個が、イイの侵蝕面  
 部土層より浅がられている。このうちの木の根は、根は断面の斜角等内には伸びずに緑黄色粘土  
 層中に大きく根に伸びており、幹は根の少し上の部分で折れもがられたような状態で倒れている。

以上のようであるの地盤状態や建物の台土状態から同時の本河川跡の浸蝕と変遷を推測すると、  
 下層の紅葉山から鬼高土層の侵蝕では、部分的な砂粘層の存在から、一時的に水の流れが滞る  
 れるものの、埋土中に浸食の現象が見られない小さな塊状の浸蝕穴を粘土層を主体としている  
 ことから、地下水位の高い河川跡の土層を形成していたことが判し、創成や本の侵蝕の後に行り、  
 その侵蝕部の存在には本がもっていた浸蝕が推測される。上層の紅葉山等の侵蝕になると、よから  
 この浸蝕に水が流れ込み、紅葉土層は水によって削平されて、厚い砂粘層による平均的河  
 溝が形成される。その侵蝕の程度は距離には恒定的に決まっているようであるが、砂や砂の量によ  
 る河川の土質によるものか、あるいは河川侵蝕の位置があったのか、水質が異なるで砂質土が厚く  
 傾斜し、鬼高土層の内に若干の窪みを残す程度に侵蝕したようである。

表4-6 河川跡土層土土質調査表

No.	調査地点	断面・地形手置の特徴	調査手置の特徴	土色・土質	備考
1	埋土 断面11.4	粘土層の上に成層、1層 厚は約20cmに厚い。傾 斜に傾く。浸蝕を呈する。	1層部内径約20cm、傾 斜に傾く。浸蝕を呈する。	白色 内径約20cm	傾斜
2	埋土 断面11.4 断面11.4 断面11.4	粘土層の上に成層、1層 厚は約20cmに厚い。傾 斜に傾く。浸蝕を呈する。	1層部内径約20cm、傾 斜に傾く。浸蝕を呈する。	白色 内径約20cm	傾斜
3	埋土 断面11.4 断面11.4 断面11.4	粘土層の上に成層、1層 厚は約20cmに厚い。傾 斜に傾く。浸蝕を呈する。	1層部内径約20cm、傾 斜に傾く。浸蝕を呈する。	白色 内径約20cm	傾斜
4	埋土 断面11.4 断面11.4	粘土層の上に成層、1層 厚は約20cmに厚い。傾 斜に傾く。浸蝕を呈する。	1層部内径約20cm、傾 斜に傾く。浸蝕を呈する。	白色 内径約20cm	傾斜
5	埋土 断面11.4 断面11.4 断面11.4	粘土層の上に成層、1層 厚は約20cmに厚い。傾 斜に傾く。浸蝕を呈する。	1層部内径約20cm、傾 斜に傾く。浸蝕を呈する。	白色 内径約20cm	傾斜
6	埋土 断面11.4 断面11.4 断面11.4	粘土層の上に成層、1層 厚は約20cmに厚い。傾 斜に傾く。浸蝕を呈する。	1層部内径約20cm、傾 斜に傾く。浸蝕を呈する。	白色 内径約20cm	傾斜
7	埋土 断面11.4 断面11.4 断面11.4	粘土層の上に成層、1層 厚は約20cmに厚い。傾 斜に傾く。浸蝕を呈する。	1層部内径約20cm、傾 斜に傾く。浸蝕を呈する。	白色 内径約20cm	傾斜
8	埋土 断面11.4 断面11.4 断面11.4	粘土層の上に成層、1層 厚は約20cmに厚い。傾 斜に傾く。浸蝕を呈する。	1層部内径約20cm、傾 斜に傾く。浸蝕を呈する。	白色 内径約20cm	傾斜

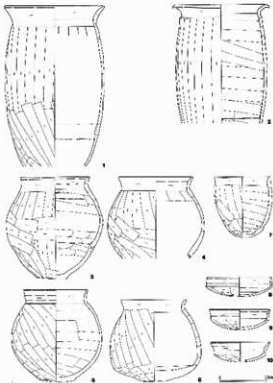


图330 四川中上蜀出土器物

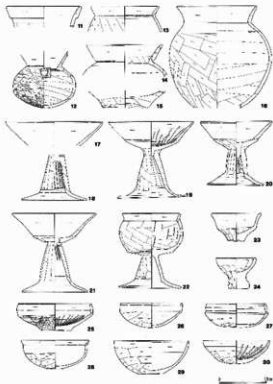


图24 河川阶下层出土器物(1)



21



22



23



24



第20圖 河川沖下層出土遺物(2)

編 號	種 類	法 量	形態・成形手法の特徴	製作手法の特徴	胎土色調	備 考
20	甕	11.5cm 12.5cm	口縁部は変形がみられる。 口縁部は縁から内側に、内 部は縁から、底部に丸みを 示す。	1 輪郭の外縁と内縁の両方 が、厚肉で平直な形、内 縁が平。	赤褐色-赤褐色	口縁部は 縁部。
		11.5cm 12.5cm	口縁部は縁から内側に、 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	1 輪郭の外縁と内縁の両方 が、厚肉で平直な形、内 縁が平。	赤褐色-赤褐色	口縁部は 縁部。 内縁は厚肉 を示す。

新橋川河川沖下層出土遺物(3)

編 號	種 類	法 量	形態・成形手法の特徴	製作手法の特徴	胎土色調	備 考
21	甕	11.5cm 12.5cm	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	赤褐色-赤褐色	口縁部は 縁部。
22	甕	11.5cm 12.5cm	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	赤褐色-赤褐色	口縁部は 縁部。
23	甕	11.5cm 12.5cm	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	赤褐色-赤褐色	口縁部は 縁部。
24	甕	11.5cm 12.5cm	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	赤褐色-赤褐色	口縁部は 縁部。
25	甕	11.5cm 12.5cm	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	赤褐色-赤褐色	口縁部は 縁部。
26	甕	11.5cm 12.5cm	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	赤褐色-赤褐色	口縁部は 縁部。
27	甕	11.5cm 12.5cm	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	赤褐色-赤褐色	口縁部は 縁部。
28	甕	11.5cm 12.5cm	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	赤褐色-赤褐色	口縁部は 縁部。
29	甕	11.5cm 12.5cm	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	口縁部は縁から内側に、口 縁部は縁から、内縁部は 縁から、底部に丸みを 示す。	赤褐色-赤褐色	口縁部は 縁部。

編 号	種 別	法 則	形 態・成 形 手 法 の 特 徴	調 整 手 法 の 特 徴	船 上・船 内 備 考	
36	点 検	目視点検 15.0分	船主船長以上の乗組員、1機師以上の乗組員が参加する。	目視確認の項目はメタンの確認、圧力低下の確認、圧力調整の確認、機器の不備の確認、異常状態の確認等である。	点検時・内点検	目視確認。
		目視点検 15.0分	船主船長以上の乗組員、1機師以上の乗組員が参加する。	目視確認の項目はメタンの確認、圧力低下の確認、圧力調整の確認、機器の不備の確認、異常状態の確認等である。	点検時・内点検	目視確認。
		目視点検 15.0分	船主船長以上の乗組員、1機師以上の乗組員が参加する。	目視確認の項目はメタンの確認、圧力低下の確認、圧力調整の確認、機器の不備の確認、異常状態の確認等である。	点検時・内点検	目視確認。
37	点 検	目視点検 15.0分	船主船長以上の乗組員、1機師以上の乗組員が参加する。	目視確認の項目はメタンの確認、圧力低下の確認、圧力調整の確認、機器の不備の確認、異常状態の確認等である。	点検時・内点検	目視確認。
		目視点検 15.0分	船主船長以上の乗組員、1機師以上の乗組員が参加する。	目視確認の項目はメタンの確認、圧力低下の確認、圧力調整の確認、機器の不備の確認、異常状態の確認等である。	点検時・内点検	目視確認。
		目視点検 15.0分	船主船長以上の乗組員、1機師以上の乗組員が参加する。	目視確認の項目はメタンの確認、圧力低下の確認、圧力調整の確認、機器の不備の確認、異常状態の確認等である。	点検時・内点検	目視確認。
38	点 検	目視点検 15.0分	船主船長以上の乗組員、1機師以上の乗組員が参加する。	目視確認の項目はメタンの確認、圧力低下の確認、圧力調整の確認、機器の不備の確認、異常状態の確認等である。	点検時・内点検	目視確認。
		目視点検 15.0分	船主船長以上の乗組員、1機師以上の乗組員が参加する。	目視確認の項目はメタンの確認、圧力低下の確認、圧力調整の確認、機器の不備の確認、異常状態の確認等である。	点検時・内点検	目視確認。
		目視点検 15.0分	船主船長以上の乗組員、1機師以上の乗組員が参加する。	目視確認の項目はメタンの確認、圧力低下の確認、圧力調整の確認、機器の不備の確認、異常状態の確認等である。	点検時・内点検	目視確認。
39	点 検	目視点検 15.0分	船主船長以上の乗組員、1機師以上の乗組員が参加する。	目視確認の項目はメタンの確認、圧力低下の確認、圧力調整の確認、機器の不備の確認、異常状態の確認等である。	点検時・内点検	目視確認。
		目視点検 15.0分	船主船長以上の乗組員、1機師以上の乗組員が参加する。	目視確認の項目はメタンの確認、圧力低下の確認、圧力調整の確認、機器の不備の確認、異常状態の確認等である。	点検時・内点検	目視確認。
		目視点検 15.0分	船主船長以上の乗組員、1機師以上の乗組員が参加する。	目視確認の項目はメタンの確認、圧力低下の確認、圧力調整の確認、機器の不備の確認、異常状態の確認等である。	点検時・内点検	目視確認。



種	種	種	種	種
1	白砂層	砂土層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。	砂層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。	砂層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。
2	白砂層	砂土層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。	砂土層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。	砂土層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。
3	白砂層	砂土層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。	砂土層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。	砂土層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。
4	白砂層	砂土層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。	砂土層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。	砂土層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。
5	白砂層	砂土層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。	砂土層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。	砂土層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。
6	白砂層	砂土層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。	砂土層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。	砂土層の上の砂層、1層厚は厚薄とともにより厚さが約1.5m、砂層は上部が厚く、下部は薄くなる。

### 第3章 その他の遺構と遺物

#### Ⅹ-1 (第34図)

本遺構は、中心部の調査区(南東部)に位置し、古墳時代前期の他方年遺構と西側に早く埋没する褐色土を切っている。調査区内で検出されたのは遺構の南端部にあたる部分で、大部分は北側の調査区外に位置する。そのうち本遺構の形質や性質は不明であるが、調査区内で検出された部分からは、方形に形成されたものではなく、人為的に掘削されたものと考えられる。

調査区内で検出された遺構の南端部の形質は、細やかな形状を呈している。壁は、長約約縦やかに傾斜しているが、中央が平坦な土器の殻をもつ。断面は平坦な低い壁をなし、奥側に傾いて若干傾斜している。また、前面の壁面には彫りが深く浅い水筒一箇の彫り込み(溝等)が部分的に見られ、壁面に小規模な溝が切っていた可能性もある。北東壁面からの深さは1.80m、南西壁面からの深さは1mを測る。

壁面は3層に分かれるが、下層と想定される黄褐色土に同数のブロックを含み置る層を境に、比較的大きな鉄分の凝集層を埋持したように均一に含め鉄分凝集層の上層(層1・2層)と、比較的小さな鉄分の凝集層を均一に含む層(層3)とを主層とする下層(層3より層)に分けることができる。このうちの層3には、水田層に採られる鉄分凝集層の山層などではないが、他に比べて鉄分を凝集に多量に含む層(鉄分層)があり、本遺構の掘り込み内にはおがある程度埋もれていたことが判る。

土質遺物は、黄土中より土器片が多数出土しているが、割合により遺構がある程度埋もれているものも少なくない。種類は古墳期のものが主で、量的には下層から多く出土しているが、本遺構が切っている南側の黄褐色土から出土した土器と割合するものもあり、褐色土から採入したものも多いことが考えられる。土層からは、多くの古墳期の土器や土器片も少量の黄褐色土の土器片が出土

してあり、層土中の火山灰層とともに中流層の厚薄が変化する。また第1層上面の礫中流層からは、数片ではあるが武蔵野流平の土器片(高野型)が出土していることは注目される。

本流層の地質は、層別地質については明確ではないが、遺跡の位置関係や層土の地層状況及び遺物の出土状態より、本流層の地質に属する大塚時代前期の土器層である黒色土の地層性に類似したことは確かである。そして地層の地質目録にはほぼ対応し、高野流平中流層には遺跡上面に近い黒色土の礫中流層が堆積して平流層になったことが推測される。

#### 表8-1 土層説明

- 第1層：武蔵野土層（礫土の層、下部に礫が厚く）
- 第2層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第3層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第4層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第5層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第6層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第7層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第8層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第9層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第10層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第11層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第12層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第13層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第14層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第15層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第16層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第17層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第18層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第19層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第20層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第21層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第22層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第23層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第24層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第25層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第26層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第27層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第28層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第29層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第30層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第31層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第32層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第33層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第34層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第35層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第36層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第37層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第38層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第39層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第40層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第41層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第42層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第43層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第44層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第45層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第46層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第47層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第48層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第49層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第50層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第51層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第52層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第53層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第54層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第55層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第56層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第57層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第58層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第59層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第60層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第61層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第62層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第63層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第64層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第65層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第66層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第67層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第68層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第69層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第70層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第71層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第72層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第73層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第74層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第75層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第76層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第77層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第78層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第79層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第80層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第81層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第82層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第83層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第84層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第85層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第86層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第87層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第88層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第89層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第90層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第91層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第92層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第93層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第94層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第95層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第96層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第97層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第98層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第99層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）
- 第100層：武蔵野土層（礫が厚く、上部が厚く）

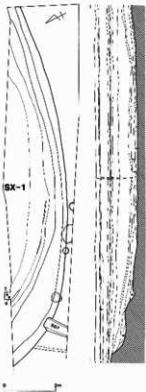


図8-1 遺跡SX-1

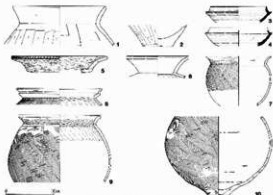


図1 調査地点SX-1の出土土器

C地点SX-1の出土土器の分類

種別	品名	数量	形態・造形手法の特徴	製法の特徴	出土層	備考
1	鉢	1	粘土製成形（手捏造）、口縁部は緩やかに内傾し、胴部は直線的。	口縁部内傾せず、胴部は直線的、外側口縁より、内傾せず。	外側口縁部内傾せず、胴部は直線的。	1層部（A） 2層部（B） 3層部（C）
2	鉢	1	粘土製成形（手捏造）、口縁部は緩やかに内傾し、胴部は直線的。	口縁部内傾せず、胴部は直線的、外側口縁より、内傾せず。	外側口縁部内傾せず、胴部は直線的。	1層部（A） 2層部（B） 3層部（C）
3	浅鉢	1	粘土製成形（手捏造）、口縁部は緩やかに内傾し、胴部は直線的。	口縁部内傾せず、胴部は直線的、外側口縁より、内傾せず。	外側口縁部内傾せず、胴部は直線的。	1層部（A） 2層部（B） 3層部（C）
4	浅鉢	1	粘土製成形（手捏造）、口縁部は緩やかに内傾し、胴部は直線的。	口縁部内傾せず、胴部は直線的、外側口縁より、内傾せず。	外側口縁部内傾せず、胴部は直線的。	1層部（A） 2層部（B） 3層部（C）
5	甕	1	粘土製成形（手捏造）、口縁部は緩やかに内傾し、胴部は直線的。	口縁部内傾せず、胴部は直線的、外側口縁より、内傾せず。	外側口縁部内傾せず、胴部は直線的。	1層部（A） 2層部（B） 3層部（C）
6	甕	1	粘土製成形（手捏造）、口縁部は緩やかに内傾し、胴部は直線的。	口縁部内傾せず、胴部は直線的、外側口縁より、内傾せず。	外側口縁部内傾せず、胴部は直線的。	1層部（A） 2層部（B） 3層部（C）
7	甕	1	粘土製成形（手捏造）、口縁部は緩やかに内傾し、胴部は直線的。	口縁部内傾せず、胴部は直線的、外側口縁より、内傾せず。	外側口縁部内傾せず、胴部は直線的。	1層部（A） 2層部（B） 3層部（C）

No.	調査地	調査方法	調査手法の特徴	調査手法の特徴	黒土の色	調査地
1	豊	200.3m	黒土層を掘り上げた後、10cm厚に十字状に溝を掘り、10cm幅の板は用紙の上に置き、10cm幅の板をその内側に置き、10cm幅の板をその外側に置き、10cm厚に十字状の溝を掘り、黒土層は平均5cm厚と推定。黒土層は厚さが不均一である。	10cm幅の内側から外側まで、黒土層は平均5cm厚と推定。黒土層は厚さが不均一である。	黒色から褐色 外側は褐色 内側は褐色	200.3m 掘削 上層は土
2	豊	17.5m 14.0m	掘削機で掘り上げた後、10cm厚に十字状の溝を掘り、10cm幅の板は用紙の上に置き、10cm幅の板をその内側に置き、10cm幅の板をその外側に置き、10cm厚に十字状の溝を掘り、黒土層は平均5cm厚と推定。黒土層は厚さが不均一である。	10cm幅の内側から外側まで、黒土層は平均5cm厚と推定。黒土層は厚さが不均一である。	黒色から褐色 外側は褐色 内側は褐色	17.5m 14.0m 掘削機 下層は土
3	豊	14.0m 11.0m 11.0m	掘削機で掘り上げた後、10cm厚に十字状の溝を掘り、10cm幅の板は用紙の上に置き、10cm幅の板をその内側に置き、10cm幅の板をその外側に置き、10cm厚に十字状の溝を掘り、黒土層は平均5cm厚と推定。黒土層は厚さが不均一である。	10cm幅の内側から外側まで、黒土層は平均5cm厚と推定。黒土層は厚さが不均一である。	黒色から褐色 外側は褐色 内側は褐色	14.0m 11.0m 掘削機 下層は土

### 黒色土壌物産調査

黒色土壌物産層は、C地点の調査区中東部から東部にかけて見られ、黒土が東部に由来して層中に埋蔵する所は比較的早く埋蔵している。この黒色土は南側に埋蔵するA地点でも埋蔵されており、土層が地中的にあることにより埋蔵層として考えられている黒色土質層もこの黒色土中に存在していたようである(岡田他1996)。他の地理との関係関係に、C地点では他の7次跡の上層を掘削し、植物の残骸を土中に埋蔵されている。

埋蔵層からの調査は、C地点調査区中東部の黒土層埋蔵位置で15cm、C地点調査区東部で最も5cmを掘る。黒色土層には、黒土層埋蔵の小型丸石遺物の和風式土器と少量の信濃土(黒土層)と、黒土層埋蔵層のものと考えられるヤマト土と土層とする黒土層(黒土層)が比較的早く埋蔵されている。黒土層埋蔵層に分かれ、黒土層埋蔵層に沿って西側からの侵入による埋蔵が認められる。また、黒土層下には植物の残骸(イボット)が埋蔵されている。

黒土層は、古墳時代後期の土層を多数含むしているが、東部には見られない。黒土層には他の7次跡の土層からその東部に埋蔵して埋蔵している黒土層から多く黒土しているが、この黒土層は他の黒色土と違って黒土中に鉄土粒子や炭化粒子を豊富に含んでおり、黒土層の中には古墳時代の土層を受けて埋蔵されているものや、黒土層の侵入しているもの(黒土層埋蔵)も見られる。

この黒色土は、黒土層より古墳時代後期に埋蔵し、中間にはほぼ埋蔵を繰り返すことが認められるが、埋蔵の埋蔵中北側に土層に埋蔵されていることから見て、古墳時代内に侵入する黒土層で埋蔵された黒土層と考えられる。

### 黒土層埋蔵土質物産調査

No.	調査地	調査方法	調査手法の特徴	調査手法の特徴	黒土の色	調査地
1	豊	100.3m 掘削機	黒土層を掘り上げた後、10cm厚に十字状の溝を掘り、10cm幅の板は用紙の上に置き、10cm幅の板をその内側に置き、10cm幅の板をその外側に置き、10cm厚に十字状の溝を掘り、黒土層は平均5cm厚と推定。黒土層は厚さが不均一である。	10cm幅の内側から外側まで、黒土層は平均5cm厚と推定。黒土層は厚さが不均一である。	黒色から褐色 外側は褐色 内側は褐色	100.3m 掘削機 下層は土
2	豊	100.4m 掘削機	黒土層を掘り上げた後、10cm厚に十字状の溝を掘り、10cm幅の板は用紙の上に置き、10cm幅の板をその内側に置き、10cm幅の板をその外側に置き、10cm厚に十字状の溝を掘り、黒土層は平均5cm厚と推定。黒土層は厚さが不均一である。	10cm幅の内側から外側まで、黒土層は平均5cm厚と推定。黒土層は厚さが不均一である。	黒色から褐色 外側は褐色 内側は褐色	100.4m 掘削機 下層は土



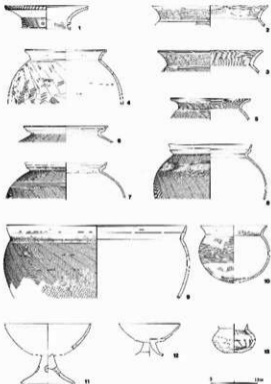
図20 Ⅱ地帯褐色土遺物出土状況



図21 Ⅱ地帯Ⅴ層出土遺物

Ⅱ地帯褐色土遺物説明

- Ⅰ層：褐色土層（遺物付層、下部は砂質土層）
- Ⅱ層：褐色土層（遺物付層、上部は土層）
- Ⅲ層：褐色土層（遺物付層、上部は土層）
- Ⅳ層：褐色土層（遺物付層、上部は土層）
- Ⅴ層：褐色土層（遺物付層、上部は土層）
- Ⅵ層：褐色土層（遺物付層、上部は土層）
- Ⅶ層：褐色土層（遺物付層、上部は土層）
- Ⅷ層：褐色土層（遺物付層、上部は土層）
- Ⅸ層：褐色土層（遺物付層、上部は土層）
- Ⅹ層：褐色土層（遺物付層、上部は土層）



第40图 C地灰黑土出土器物



## 第V章 川越田遺跡出土の叩き甕について

### はじめに

本遺跡は、編年する物の遺跡(古川遺1986)や後述遺跡(251982・83)と同時的な被覆関係を示す同一層位と考えられ、女郡川中流域の中心の集落として、古墳時代前期から後期の期間には定量的に営まれた大規模集落の一部である。本遺跡群は、女郡川中流域における流域内の自然環境上に立地する遺跡の中では、比較的早い時期に活動し、特に集落の出現期に本遺跡ではあまり例を見ない集内帯の叩き甕を伴うことは注目されよう。概々のところ、本遺跡が属する北武蔵(埼玉県)地方では、叩き甕が平時で出土する例がほとんどであり(注1)。また、本遺跡と地理的に近く古時代にあたって常に集落間関係を有する上野(群馬県)地方では、叩き甕出土した層があまり顕著に認められない(注2)という既述地域での出土状況を考慮すると、本遺跡では複数の遺層から比較的まとまって出土している点で、特殊な遺跡と評しよう。

資料本から出土する集内帯の叩き甕については、近年宮城雄一氏や西村修一氏によって、その集内と検討が行われ、その遺存時期や産地モードが具体的に論じられている(宮城1990、西村1993)。前者の指摘にはかなりの相違が認められるが、それぞれに注目すべき点も多い。しかし、資料式の場合は、地層の固定はされていないが、集内の条件が古く評定学領域の遺跡にあるようであり、本遺跡もそのたぐい産地の遺跡の大多数は、その集内条件から認められている。また、叩き甕の産地に関しては、本遺跡の叩き甕も該当すると思われる叩き甕の産地ハブ調整を施す既分製の器類と類似を、集内帯の産地として考えられている面があるなど問題がある。古川武の場合、比較的集落規模でまとまった文字ではあるが、そのぶん産地に特色をよりに感じられ、随所に産地を異にするもの、叩き甕の基本的な分類や検討がかなり強制的で、具体的な説明が不足していると思われる。また、本遺跡の叩き甕については武の分類されたY2型の典型として注記されているが、武の集内の全体は叩き甕の産地帯を知る上で集内地方と直接対比できるY0型にあるため、このY2型の上層としての具体的な検討は行われていない。そのため、ここでは両武の調査を参考にしながら、両武の叩き甕の中では新しいあるいは後期的とされた本遺跡の叩き甕について、再認識する意味であらためて少し検討してみたい。

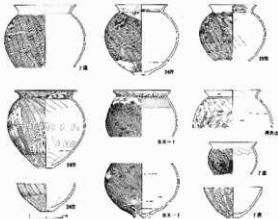
### 1. 叩き甕の産地

本遺跡では、A地点の第44号住居的-第21号住居層-第7号遺跡、B地点の第4号住居層、C地点の第Y-1-1号土器土倉層より、叩き甕の産地が認められる土器が破片を含めて12個群分出している。器種としては変と風があるが、概して叩き甕の下半分の形態と類似する器の大部分のものが、A地点第7号遺跡から出土しているだけで、他はすべて惣と考えられるものである(図41図)。これらの叩き甕は、A地点の調査区北東側からC地点に位置する遺層から多く出土しており、それらの産地は第7号遺跡-同一区土倉層-第Y-1という産地関係を有するが、それらの産地から出土した叩き甕には、形質や技法上の産地はほとんど認められない。

本遺跡から出土した叩き甕は、11個群が丸く仕上げられているもの(A型群)と、口縁外面に平面を面をもち、11個群(1層を上方につまみ上げるもの(B型群)の2形態がある(注3)。このうちの



口縁部彫刻は、向縁部の他に施される(図30)の彫刻の形態としては一般的なものではなく、甲を覆形等の(図30)彫刻とすることもできる。そのため、A地(黒部)の片側(向縁部)から出土しているものを下の二光彫刻により片側に甲の彫刻が両面彫刻できない(図30)彫刻は彫刻の大部分が甲の裏(裏面)についている。甲を成形による彫刻の可能性が考えられる(図31)。これは、いずれも彫刻が彫刻に強く張り、最大径を彫刻の中心に持つ。彫刻は、いずれも彫刻の厚い輪状の小さな平面を呈するが、彫刻から若干突出するもの(彫刻厚部(図31))と突出しないもの(彫刻厚部(図31))がある。彫刻は、粘土質の積み上げによる甲を成形(図31)であるが、胴下部に一定比例的な彫刻を施す彫刻が認められるものが多く、胴下部とそれより上の彫刻とは、いわゆる「彫刻彫刻」(彫刻彫刻)によって成形されたものと考えられる。甲は、二光彫刻のために彫刻ではないが、1mmあたり2〜3mmの比較的粗い彫刻のものが多く、甲を彫刻の彫刻がほぼ一定しているものが多いことから、おそらく「彫刻彫刻」(彫刻彫刻)によるものと思われる。また、彫刻彫刻彫刻(彫刻彫刻)には、右と左の彫刻の下に彫刻の彫刻が施されるものもある。彫刻の彫刻は、甲を成形の後に部分的に施す(図31)を施し、最終的に彫刻の彫刻彫刻(彫刻彫刻)の大部分に施されるものがほとんどである(図31)。内面彫刻は、彫刻の彫刻から出土した彫刻(彫刻彫刻)にケズリのような彫刻が部分的に施されているもの、ほとんどが彫刻の彫刻(図31)



第41図 川越前遺跡出土甲を成形土器

器物で、底部内面にハナ割型や全面に十字割型を施すものはない。口縁部は、ハナ割型の側にのみ十字を施すものが主体的である。

以上のような特徴をもつ本遺跡の印かけ型は、奈良県丹波氏が黒V型式器の特徴とされた印かけ型（注1）と類似の底部一部分が斜線状（図内1991-82）がそれぞれ認められることから、直接のつながりかは不明だが、基本的には畿内黒V型式器型の系譜を引くものとすることができる。前日本で出土している印かけ型は、畿内地方の畿内型ではなく、黒V型式器型の系譜を引くものがほとんどである（小畑1943, 岩崎1956, 西川1991）ことから、本遺跡の印かけ型も奈良中にもっとも一般的な系譜のあり方を示していると言える。

## 2. 印かけ型の断片的位置と系譜

本遺跡の印かけ型の断片的位置については、すでに山口守成氏と西川氏によって簡単に概ね示されている（小畑1943, 西川1991）。山口氏は、図11（断片）による断片集片型に近縁に含有するS字型の分割と縮小（図11（断片））を参考にして、本遺跡の所在する糸織野遺跡の印かけ型の断片とその種類について検討を行っている。その中で本遺跡の印かけ型にも若干認められ、A地産黒V型器型（宮内館1990）で採得したS字型の断片（山口氏の図例12（断片））から、畿内の黒V式（黒向V式）に類似するとされ、「糸織野のタケノコ型型」とは断片的なギャップが生じている」とされた。西川氏は、断片地方内上の印かけ型を畿内平式型の「的形器」をかなり忠実に写しているものと、「ハナ多面化するなど、本来的な「的形器」がたいがら断片を持つもの」に類似し、前者をオリジナルに認めることから「Vの型」、後者を在地型ということから「Y型」と区別され、本遺跡の印かけ型などは「Y型」の典型とされた。そして「断片的にV型の方が地形的」と考え、本遺跡の印かけ型については、採得した文字

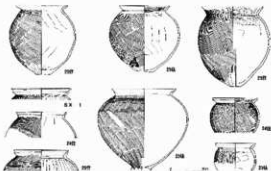


図4 川越野遺跡出土器

響C型(永野1990)との関係から、「Y型」の中でも新しい近内型標準の形態としている。また、この「Y型」の形態については、明確には述べられていないが、「イリシナルには見られるが、型式変化をしているもの」<sup>1)</sup>、在地での変化という観点<sup>2)</sup>などの指摘から、畿内地方から東畿内に波及したものであるが、在地において二次的に変化した可能性が高いものと考えているように思われる。ただし、畿内のみならず畿内以外で、通常Y型(畿内様式標準)段階の音A(畿内様式音節)に、ハク型節により印字の一部を両手音が不足ながら存在することが指摘されている(岡田1998)ことに留意され、「Y型」といったものには、音変化の音Aだものの特徴、Y型と前後関係にないものが含まれる可能性がある<sup>3)</sup>と、畿内地方に正確な標準をもつものがある可能性についても留意されている(注7)。

このように、既述ともA地標準型化段階で印字型と併出した多字型の時期から、畿内地方との併行関係を考えられ、北川氏は「春型Y型」、遠田氏は「近内型標準」の時期とされている。両者の畿内標準における時期の表現には差異があるが、その時期決定が印字音自体によるものではなく、多字型を基準とした時期決定であることに注意されよう。この標準型化段階から出た多字型は、永野式標準の多字型に型に該当するものである。北川氏は近年多字型をさらに細分され、C型はAと別の2段階に分けられている(永野1998)。それによると標準型化段階内での多字型は、東部は併合型(併合型)でも古い形態ではあるが、西部は上段の併合が強く、口語型がやや標準化する型でも新しい形態のものが見られることから、ほぼC型の入音節から東部型に併化する現象と考えられる。この多字型C型は、京西門外地方における永野式(和野標準)、土佐型永野式(和野標準)の標準となっており、両式とも畿内の「永野式入音節」に併行するとされている(永野1990, 1998)。畿内型化段階の印字型と多字型C型の併存現象については、連続の純粋状況などから若干の不安もあるが、この併存関係を踏めるならば、ほぼ標準型永野式(畿内Y型)に併行する時期と考えることができよう。しかし、今後の資料による検証と併出した他の音節による検討が必要と思われる。

概か本標準の印字型は、その形態的特徴や製作法以上の特徴から見ても、畿内地方の近内式に見られる「伝統的畿内様式」(注8)の型式範囲の中でも比較的新しい段階に位置付けられるものであろう。畿内地方の伝統的畿内様式の経路については、西内標準型により北畿内下層式以後東部の経路とともに北部が平部から東部あるいは北東化するという型式変化が示されており、その標準時期については畿内小標準では氏の「近内型」に同意し、畿内周辺部では「永野式標準型」にある氏の「東内型」まで残存するとされている(永野1998・99)。畿内型の成長は常に進行する伝統的畿内様式の文脈・発展化は、永野式や東内式が整備されるように(永野1998, 1999)、近内型の影響によるものと考えられるが、本標準の印字型のような若い輪郭の型化段階のものも残存していることは注意される。このような永野式が再編された畿内地方における伝統的畿内様式の経路が、畿内地方で一帯なのか東部には解らないが、文脈・発展化の早い地域で若い形態、主体的な地域や実体的な地域など、特に畿内中北部に比べて副都の自然な資料が欠落している畿内周辺部とされる地域では、その併行する過程も含めて類多の集積期や純粋内での成長期もあるのではいかと思われる。いづれにしても、本標準の印字型が、畿内地方の伝統的畿内様式の直接的な影響によるものなのか、畿内標準から近内式の古い形態に東日本に伝播した畿内標準型がその後進地において変化したものなのか、畿内周辺部の伝統的畿内様式の長期的な経路が概かになる

の金器もなければ、銅器では琺瑯を施すはできないであろう。

### 3. 美玉地方の甲冑

美玉地方では、現在のところ本遺跡の他にほかに新田町御蔵前遺跡(新田町御蔵前)で、中野の甲冑堂が出土しているだけである(御蔵前)。新田町御蔵前遺跡に、本遺跡より約7m上層の美玉丘陵に立脚する、新田時代後葉後半—古墳時代前期を上層とする遺跡であるが、甲冑堂は美玉時代後葉後半の埴土器を上層とする第1層に遺跡の内部より出土している。この甲冑堂は、最大径を口縁部に有し、胴部の胴縁と胴部の傾りが鋭く、胴部は厚く突起し外側中帯部が窪むもので、香取遺民の形式分類(香取1989)では、畿内地方で新干式式後半より見られるとされた器型中の系例に類似する形態を呈している。甲冑は、二次調整のための段階ではないが、1cmあたり2重の鋭い刃とがりの甲まで、胴部から口縁部まで甲冑目の角化がほぼ一定していることから、「透鏡マセントラを子注」と「透鏡甲を子注」(香取1989)によって、胴部より先に甲冑を上げると推定が定かと思ある。外側の調整は、甲冑を施した後、胴部を金に鍍すや調整を施して甲冑目を閉している。内面も鍍すや調整であるが、胴部には透鏡状のハケ調整を施している。

この新田町御蔵前遺跡出土の甲冑堂は、胴部が厚く突起する形態であることや胴部内面に透鏡状のハケ調整を施すなど新干式式の特徴をもつが、その編年の位置については、19層に於いて最も古い器型、甲冑堂の形態、及び修復した直後の新干式土器の時期から見て、新干式式後半でも比較的新しい時期と見られ、北九州新干式に近い時期に修復行われるものと推定される(香取1989)。これは、瀬川氏が指摘された国東地方への畿内系甲冑堂の波及物に近似的ものであり(香取1989)、本遺跡の甲冑堂の特徴でもある外周二次調整がすでにこの段階に見られることは注目されよう。

このように新田町御蔵前遺跡の甲冑堂は、本遺跡の甲冑堂よりも新干式式古いものであり、すでに新干式式後半より高度分化して系例の異なる両者を区別対比して考えることは、資料の多少性もあって困難にならざるを得ないが、時期的に両者の中間に位置し、両遺跡の甲冑堂の関係を考える上で留意すべき資料として、本遺跡の南東隅約4mのところで埋没地に位置する美玉町土成川遺跡出土の香取(美玉町)99に出土の上層がある。香取(美玉町)99層位は、後遺跡の影響を受けた香取系土器の他に、北九州—玄室系部系—畿内系の土器が出土していることで重要である(香取1989)。このうちの畿内系の土器としては、内式に特徴的な「内周帯突起外縁」(香取1989)に類似する器型が注目されているが、これとともに胴部が鋭角状の平底を呈するハケ調整の痕が出土している(香取1989)。この痕は、胴部外面に透鏡甲冑目を調整できないため、甲冑成形によるものを判別できないが(香取1989)。



新田町御蔵前遺跡(1)甲冑



美玉町土成川遺跡出土の畿内系土器



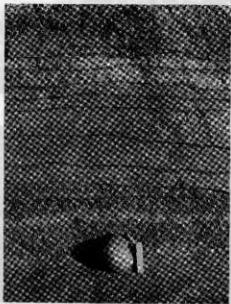
美玉町土成川遺跡(2)甲冑



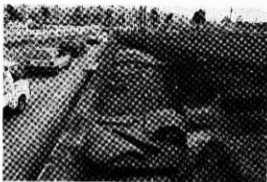




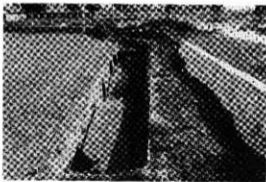
# 写真図版







1. 川縣閃綠輝石地塊全景



2. 川縣閃綠輝石地塊全景



1. 第7号位前脚



2. 第30号位前脚



1. 第20号位后部



2. 第20号位后部カマド



1. 圖32号位菌絲



2. 圖43号土壤



1. 第33号位層砂



2. 第33号位層砂カマド



1. 第24号位菌類



2. 第24号位菌類カマド



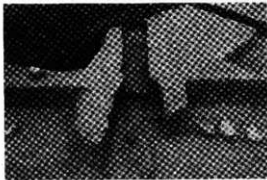
1. 第35号性腐跡



2. 第36号性腐跡 - 第44号土壤



1. 第37号位層部

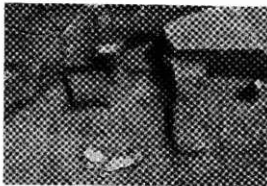


2. 第37号位層部カマド

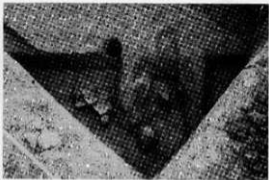




1. 標39号住居跡



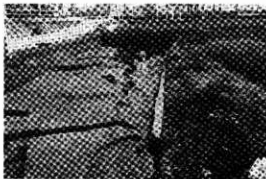
2. 標39号住居跡カマド



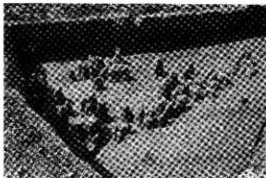
1. 第42号位岩跡



2. 第42号位岩跡遺物出土状態



1. 洛地水河川蘇西側調查區上層土層



2. 洛地水河川蘇西側調查區土層出土狀態



1. 阜地点河川跡西側調査区土層断面



2. 阜地点河川跡西側調査区下層部出土状況



1. 蘇地水河川斷面側面圖



2. 蘇地水河川斷面側面圖下部圖



1. 蘇州虎丘河川調查所調查區下層白粉土出土狀態



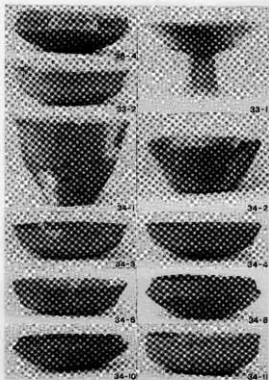
2. 蘇州虎丘河川調查所調查區下層白粉土出土狀態



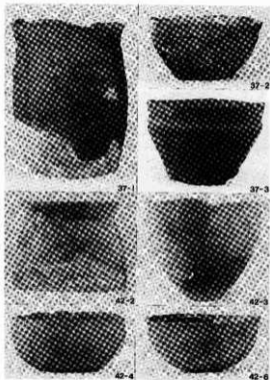
1. C點点SX-1



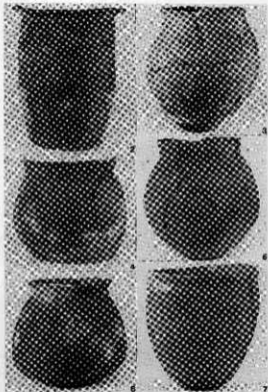
1. C點点黑色土质物出土状图



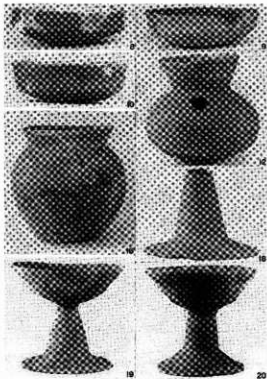




住居層出土土器(2)



● 地衣河川群出土土器(1)





22



25



26



28



30



23



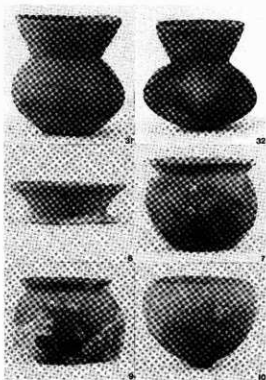
24



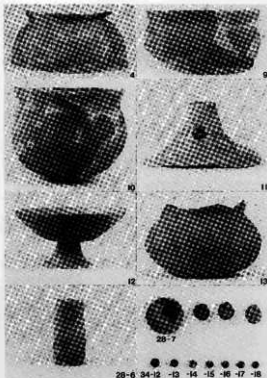
27



29



B地点河川原出土土器(4)、C地点SA-1出土土器



瓦玉町遺跡調査会報告書第5集

## 川越田遺跡Ⅱ

(B・C地点の調査)

平成5年3月25日 印刷

平成5年3月25日 発行

発行所 瓦玉町遺跡調査会  
埼玉県川越市大宮2-1-10

印刷所 たつみ印刷株式会社  
埼玉県川越市大宮2-1-10